

かしてつけて、最早あの顔を見ぬ決心で出て参りました、まだ私の手より外離れの守りでも、承諾せぬほどの彼の子を、欺して寐かして夢の中に、私は鬼に成つて出て参りました、御父様、御母様、察して下さりませ私は今日まで遂に原田の身に就いて御耳に入れました事もなく、勇と私との中を人に言ふた事は御座りませぬけれど、千度も百度も考へ直して、二年も三年も泣き盡して今日といふ今日どうでも離縁を貰ふて頂かうと決心の臍をかためました、何うぞ御願ひで御座ります離縁の状を取つて下され、私はこれから内職なり何なりして亥之助が片腕にもなられるやう心がけますほどに、一生一人置いて下さりませとわつと腹たてるを噛しめる襦袢の袖、墨繪の竹も紫竹の色にや出ると哀れなり。

夫れは何ういふ仔細でも父も母も詰寄つて問かゝるに今までは黙つて居ましたけれど私の家の夫婦さし向ひを半日見て下さつたら大底が御解りに成ませう、物言ふは用事のある時慥食に申つけられるばかり、朝起きて機嫌をきけば不圖脇を向ひて庭の草花を態とらしき褒め詞、是にも腹はたてども良人の遊ばす事なればと我慢して私は何と言葉あらそひした事も御座んせぬけれど、朝飯あがる時から小言は絶えず、召使の前にて散々と私が身の不器用不作法を御並へなされ、夫れはまだ辛棒もしませうけれど、二言目には教育のない身、教育のない身と御義

みなさる、それは素より華族女學校の椅子にかゝつて育つた物ではないに相違なく、御同僚の奥様がたの様に花のお茶の、歌の畫のと習ひ立てた事もなければ其御話しのお相手は出来ませぬけれど、出来ずは人知れず習はせて下さつても濟むべき筈、何も表向き實家の悪いを風聞なされて、召使ひの婢女どもに顔の見られるやうな事なさらずとも宜かりさうなもの、嫁入つて丁度半年ばかりの間は開や開やと下へも置かぬやうにして下さつたけれど、あの子が出来てからと言ふ物は丸で御人か頼りまして、思ひ出して恐ろしく御座ります、私はくら暗の谷へ突落されたやうに暖かい日の影といふを見た事が御座りませぬ、はじめの中は何か申談に態とらしく邪慥に遊ばすのと思ふて居りましたけれど、全くは私に御飽きなされたので此様もしたら出てゆくか、彼様もしたら離縁をと言ひ出すかと苦めて苦めて苦め抜くので御座りませぬ、御父様も御母様も私の性分は御存じ、よしや良人が藝者狂ひなさらうとも、圍ひ者して御置きなさらうとも其様な事に格氣する私でもなく、侍婢どもから其様な噂も聞えまするけれど彼れほど働きのある御方なり、男の身のそれ位はありうちと他處行には衣類にも氣をつけて氣に逆らはぬやう心がけて居りまするに唯もう私の爲る事としては一から十まで面白くなく覺しめし、著の上げ下しに家の内の楽しくないは妻が仕方が悪いからだと仰しやる、夫れも何ういふ事

が悪い、此處が面白くないと言ひ聞かして下さる様ならば宜けれど、一筋に詰らぬくだらぬ、解らぬ奴、とても相談の相手にはならぬの、いは太郎の乳母として置いて遣はすのと嘲つて仰しやる許、ほんに真人といふではなく彼の御方は鬼で御座ります、御自分の口から出てゆけどは仰しやりませぬけれど私が此様な意久地なして太郎の可愛さに気が引かれ、何うでも御詞に異背せず唯々と御小言を聞いて居りますれば、張も意氣地もない思ふたらの奴、それからして氣に入らぬと仰しやります、左うかと言つて少しなりとも私の言條を立て、負けぬ氣に御返事をしましたら夫を取てに出てゆけと言はれるは必定、私は御母様出て来るのは何でも御座んせぬ、名のみ立派の原田勇に離縁されたからとて夢さら残りをしていとは思ひませぬけれど、何にも知らぬ彼の太郎が、片親に成るかと思ひますると意地もなく我慢もなく、詫て機嫌を取つて、何でも無い事に恐れ入つて、今日までも物言はず辛棒して居りました、御父様、御母様私は不運で御座りますと口惜しと悲しと打出し、思ひも寄らぬ事を談れば兩親は顔を見合せ、さては其様の憂き中かと思はれて暫しい言もなし。

母親は子に甘きならひ、聞く毎々に身にしみて口惜しく、父様は何と思し召すか知らぬが元來此方から貰ふて下されと願ふて遣つた子ではなし、身分が悪いの學校が何うしたのと宜くも宜

くも勝手な事が言はれた物、先方は忘れたかも知らぬが此方はたしかに日まで覺えて居る、阿開が十七の御正月、また門松を取らせぬ七日の朝の事であつた、舊の猿樂町の彼の家の前で御隣の小娘と追羽根して、彼の娘の突いた白い羽根が通り掛つた原田さんの車の中へ落たとつて夫れをば阿開が貰ひに行きした、其時はじめて見たとか言つて人橋かけてやい〜と貰ひたがる、御身分がらにも釣合ひませぬし、此方はまた根つからの子供で何も稽古事も仕込んで置ませず、支度とても唯今の有様で御座いますからとて幾度断つたか知ればせぬけれど、何も異姑のやかましいが有るでは無し、我が欲しくて我が貰ふに身分も何も言ふ事はない、稽古は引取つてからでも充分させられるから其心配も要らぬ事、兎角くれさへすれば大事にして置かうからと夫は火のつく様に催促して、此方から強請た譯ではなければ支度まで先方で調へて謂は、御前は戀女房、私や父様が遠慮して左のみは出入りをせぬといふも勇さんの身分を恐れては無い、これが妾手かけに出したのではなし正當にも正當にも百まんたら頼みによこして貰つて行つた嫁の親、大威張に出遣入しても差つかへは無けれど、彼方が立派にやつて居るに、此方が此通りつまらぬ活計をして居れば、御前の縁にすがつて錚の助力を受けもするかと他人様の所思が口惜しく、瘦せ我慢では無けれど交際だけは御身分相應に盡して、平常は逢い

たい娘の顔も見ずに居ます、夫れをば何の馬鹿々々しい親なし子でも拾つて行つたやうに大層らしい、物が出来ると出来ぬのと宜く其様な口が利けた物、黙つて居ては際限もなく暮つて夫れは夫れは癪に成つて仕舞ひます、第一は婢女どもの手前奥様の威光が削げて、未には御前の言ふ事を聞く者もなく、太郎を仕立てるにも、母様を馬鹿にする氣になられたら何とします、言ふだけの事仕度言ふて、それが悪いといふたら何の私にも家が有ますとて出て来るが宜からうでは無いか、實に馬鹿々々しいとつては夫れほどの事を今日の日まで黙つて居るといふ事があります物か、餘り御前が温順し遇るから我儘がつのられたのである、聞いた計でも腹が立つ、もう一退けて居るには及びません、身分が何であらうが父もある母もある、年はゆかねど亥之助といふ弟もあればその様な火の中にじつとして居るには及ばぬこと、なわ父機一遍勇さんに逢ふて十分油を取つたら宜う御座りましよと母は猛つて前後もかへり見ず。父親は先刻より腕ぐみして目を閉ぢて有けるが、あゝ御袋、無茶の事を言ふてはならぬ、我しと始めて聞いて何うした物かと思案にくれる、阿闍の事なれば並大底で此様な事を言ひ出しさうにもなく、よく一怒らさに出て来たと思えるが、して今夜は舞どのは不在か、何か改たまつての事件でもあつたか、いよ一離縁するとも言はれて来たのかと落ついて問ふに、良

人は一昨日より家へとては歸られませぬ、五日六日と家を明けるは平常の事、左のみ珍らしいとは思ひませぬけれど出際に召物の揃へかたが悪いとて如何ほど詫びても聞入れがなく、其品をば脱いで擲きつけて、御自身洋服にめしかへて、呀、私位不仕合の人間はあるまい、御前のやうな妻を持つたのはと言ひ捨てに出て御出で遊ばした、何といふ事で御座りませう一年三百六十五日物いふ事も無く、稀々言はれるは此様な情ない詞をかけられて、夫れでも原田の妻と言はれたいか、太郎の母で候と顔をし拭つて居る心か、我身ながら我身の辛棒がわかりませぬもう一もう私は良人も子も御座らせぬ嫁入せぬ昔しと思へば夫れまで、あの頭はない太郎の寝顔を眺めながら置いて来るほどの心になりましたからは、最う何うでも勇の傍に居る事は出来ませぬ、親はなくとも子は育つと言ひまするし、私の様な不運の母の手で育つより繼母御なり、御手かけなり氣に適ふた人に育て、貰ふたら、少しは父御も可愛がつて後々わの子の爲にも成ませう、私はもう今宵かぎり何うしても歸る事は致しませぬとて、断つても断てぬ子の可憐さに、奇麗に言へども詞はふるへぬ。

父は歎息して、無理は無い、居惹らくもあらう、困つた中に成つたものよと暫時阿闍の顔を眺めしが、大丸鬚に金輪の根を巻きて黒縮緬の羽織何の惜しげもなく、我が娘ながらもいつしか

調ふ奥様風、これを結び髪に結ひかへさせて綿錦仙の半天に禪がけの水仕業とする事いかにして忍ばるべき、太郎といふ子もあるものなり、一端の怒りに百年の運を取はつして、人には笑はれものとなり、身はいにしへの齋藤主計が娘に戻らば、泣くとも笑ふとも再度原田太郎が母とは呼ばるゝ事成るべきにもあらず、良人に未練は残さずとも我が子の愛の断ちがたくは離れていよゝ物をも思ふべく、今の苦勞を戀しがる心も出づべし、斯く形よく生れたる身の不幸、不相應の縁にたがれて幾らの苦勞をさする事と哀れさの増れども、いや阿闍こう言ふと父が無慈悲で汲取つて呉れぬのと思ふか知らぬが決して御前を叱かるではない、身分が釣合はねば思ふ事も自然違ふて、此方は真から盡す氣でも取りやうに寄つては面白くなく見える事もあらう、勇さんだからとて彼の通り物の道理を心得た、利發の人ではあり随分學者でもある、無茶苦茶にいぢり立てる譯ではあるまいが、得て世間に寝物物の敏腕家など言はれるは極めて恐ろしい我まゝ物、外では知らぬ顔に切つて廻せど勤め向きの不平なまでに家内へ歸つて當りちらされる、的に成つては随分つらい事もあらう、なれども彼れほどの良人を持つ身のつとめ區役所がよひの腰辨當が釜の下を焚きつけて呉るのとは格が違ふ、随がつてやかましくもあらう六づかしくもあろう夫を機嫌の好い様にとゝのへて行くが妻の役、表面には見えぬと世間の

奥様といふ人達の何れも面白くをかしき中ばかりは有るまじ、身一つと思へば恨みも出る、何の是れが世の勤めなり、殊には是れほど身がらの相違もある事なれば人一倍の苦もある道理、お袋などが口廣い事は言へど彦之が昨今の月給に有ついたも必竟は原田さんの口入れではなからうか、七光どころか十光もして間接ながらの恩を着ぬとは言はれぬに愁らからうとも一つは親の爲弟の爲、太郎といふ子もあるものを今日までの辛棒がなるほどならば、是れから後とて出来ぬ事はあるまじ、離縁を取つて出たが宜いか、太郎は原田のもの、其方は齋藤の娘、二度縁が切れては二度と顔見にゆく事もなるまじ、同じく不運に泣くほどならば原田の妻で大泣きに泣け、なお關さうでは無いか、合點がいつたら何事も胸に納めて知らぬ顔に今夜は歸つて、今まで通りつゝしんで世を送つて呉れ、お前が口に出さんども親も察する弟も察する、涙は各自に分て泣かうぞと因果を含めてこれも目を拭きて、阿闍はわつと泣いて夫れでは離縁をどいふたも我まゝで御座りました、成程太郎に別れて顔も見られぬ様にならば此世に居たとて甲斐もないものを、唯目の前の苦をのがれたとて何うなる物で御座んせう、ほんに私さへ死んだ氣にならば三方四方波風たゞず、兎もあれ彼の子も兩親の手で育てられまするに、つまらぬ事を思ひ寄まして、貴君にまで嫌やな事を御聞かせ申しました、今宵限り關はなくなつて魂一つが

彼の子の身を守るのと思ひますれば、良人のつらく當る位百年も辛棒出來さうな事、よく御言葉も合點が行きました、もう此様な事は御聞かせ申させぬほどに心配をして下さりますなどて拭ふわとから又涙、母親は聲たて、何といふ此娘は不仕合と又一しきり大泣きの雨、くもらぬ月も折から淋しくて、うしろの土手の自然生の弟の亥之が折て来て、瓶にさしたる薄の穂の招く手振りも哀れなる夜なり。

實家は上野の新坂下、駿河臺への路なれば茂れる森の木の下に暗詫しけれど、今宵は月もさやかに、廣小路へ出れば晝も同様、雇ひつけの車宿とて無き家なれば路ゆく車を窓から呼んで合點が行つたら兎も角も歸れ、主人の留守に断なしの外出、これを咎められるとも申譯の詞は有るまじ、少し時刻は遅れたれど車ならば途ひ一ト飛、話しは重ねて聞きに行かう、先づ今夜は歸つて呉れとて手を取つて引出すやうなるも事あら立止の親の慈悲、阿關はこれまでの身と覺悟して父様、お母様、今夜の事はこれ限り、歸りますからは私は原田の妻なり、良人を許しは濟みませぬほどに最う言ひませぬ、關は立派な良人を持つたので弟の爲にも好い片腕、あゝ安心など喜んで居て下されば私は何も思ふ事は御座んせぬ、決して決して不了簡なと出すやうな事はしませぬほどに夫れも案じて下さりますな、私の身體は今夜をばじめに勇の

ものだと思ひまして、彼の人の思ふまゝに何となりして貰ひませよ、夫では最う私は戻ります、亥之さんが歸つたらば宜しくいふて置いて下され、お父様もお母様も御機嫌よう、此次には笑ふて参りますとて是非なさうに立おがれば、母親は無けなしの巾着さげて出て駿河臺まで何程でゆくも門なる車夫に聲をかくるを、あ、お母様それは私がやります、有がたう御座んしたと温順しく挨拶して、格子戸くれば顔に袖、涙をかくして乗り移る哀れさ、家には父が暖拂ひの是れもうるめる慶なりし。

(下)

さやけき月に風のおと添ひて、虫の音たえく物かなしき、上野へ入りてよりまだ一町もやうくと思ふに、いかにしたるか車夫はびつたりと轆を止めて、誠に申かねました私にこれで御免を願ひます、代は入りませぬからさ下りなすつてと突然にいはれて、思ひもかけぬ事なれば、阿關は胸をどつきりとさせて、あれお前そんな事を言つては困るではないか、少し急ぎの事でもあり増しは上げやうほどに骨を折つても呉れ、こんな淋しい處では代りの車も有るまいではないか、それはお前人困らせといふ物、愚圖らずに行つても呉れと少しふるへて願ひやう

に言へば、増しが欲しいと言ふのでは有りませぬ私から願ひです何うぞ下りなすつて、最
 う引くのが厭やに成つたので御座りますと言ふに夫ではお前加減でも悪るいかな、まの何うした
 と言ふ譯、此處まで挽いて来て厭やに成つたでは済むまいがね、聲に力を入れて車夫を叱れば
 御免なさいまし、もう何うでも厭やに成つたのですからとて提燈を持しまし、不圖脇へのがれて
 お前は我まの車夫さんだね、夫ならば約定の處までとは言ひませぬ、代りのある處まで行つ
 て呉れ、ば夫でよし、代はやるほどに何處か開處らまで、切めて廣小路まで行つて呉れと
 優しい聲にすかす様だ、いへば、成るほど若い方ではあり此淋しい處へよろされては定めし
 困りなさらませう、これは私が悪う御座りました、ではお乗せ申ませう、お供を致しませう、
 無事驚きなさりましたらうとて悪者らしくもなく提燈を持かゆるに、お關もはじめて胸をなで、
 心丈夫に車夫の顔を見れば三十五六の色黒く小男の瘦せぎす、あ、月に背けたあの顔が誰れや
 らで有つた、誰れやらに似て居ると人の名も咽元まで轉がりながら、もしやお前さんとは我知
 らず聲をかけるに、え、と驚いて振あふ男、あれお前さんは彼の方では無いか、私をよ
 やお忘れはなさるまいと車より導るやうに下りてつく／＼と打まれば、貴様は齋藤の阿關さ
 ん、面目も無い此様な姿で、背後に目が無ければ何の氣もつかずに居ました、夫れでも音聲に

も心づくべき筈なるに、私は餘程の鈍に成りましたと下を向いて身を恥れば、阿關は頭の先よ
 り爪先まで眺めていゝ私だとして往來で行違ふた位ではよもや貴君と氣は付きませぬ、唯
 た今の先までも知らぬ他人の車夫さんとのみ思ふて居ましたに御存じないは當然、勿體ない事
 であつたれど知らぬ事なればゆるして下され、まの何時から此様な業して、よく其か弱い身に
 障りもしませぬか、伯母さんが田舎へ引取られてお出なされて、小川町の店をお廢めなされ
 たといふ噂は他處ながら聞いても居ましたれど、私も昔の身でなければ種々と障る事があつ
 てな、お尋ね申すは更なること手紙あける事も成ませんかつた、今は何處に家を持つて、お内
 儀さんも御健勝か、小兒のも出来てか、今も私は折ふし小川町の勤工場見物に行きます度々、
 舊のち店がそつくり其儘同じ煙草店の能登やといふに成つて居まするを、何時通つても覗かれ
 て、あゝ高坂の録さんが子供であつたころ、學校の行返りに寄つては巻煙草のこぼれを貰ふて
 生意氣らしう吸立てた物なれど、今は何處に何をして、氣の優しい方なれば此様な六づかし
 世に何のやうの世渡りをしてお出なうか、夫れも心にかかりまして、實家へ行く度に御様子
 を、もし知つても居るか聞いては見まするけれど、猿樂町を離れたのは今で五年の前、根っ
 からお便りを聞く縁がなく、何んなにも懐しう御座んしたらうと我身のはどをも忘れて問ひか

くれば、男は流れる汗を手拭にぬぐふて、お恥かしい身に落まして今は家と言ふ物も御座りませぬ、寐處は淺草町の安宿、村田といふが二階に轉がつて、氣に向ひた時は今夜のやうに遅くまで換く事もありませんし、厭やと思へば日がな一日ごろくとして畑のやうに暮して居まする、貴嬢は相變らずの美しくし、奥様に成りなされたを聞いた時から夫でも一度は拜む事が出来るか、一生の内に又も言葉と交はす事が出来るかと夢のやうに願ふて居ました、今日までは入用のない命と捨て物に取りあつかふて居ましたけれど命があればこそ御對面、お宜く私を高坂の餘之助と覺えて居て下さりました、辱なう御座りますと下を向くに、阿闍はさめとして離れも憂き世に一人と思ふて下さるな。

さてお内儀さんとは阿闍の問へば、御存じで御座りましょ筋向ふの杉田やが娘、色が白いか恰好が何うだとか言ふて世間の人は暗雲に覆めたてた女で御座ります、私が如何にも放蕩をつくして家へとは寄りつかぬやうに成つたを、貰ふべき頃に貰ふ物を貰はぬからだと親類の中の解らずやが勘違ひして、彼れならばと母親が眼鏡にかけ、是非もらへ、やれ貰へど無茶苦茶に進めたる五月蠅さ、何うなりと成れ、成れ、勝手に成れとて彼れを家へ迎へたは下度貴嬢が御懐妊だと聞きました時分の事、一年目には私が處にも目出たうを他人からは言はれて、犬

張子や風車を並べたてる様に成りましたれど、何のそんな事で私が放蕩のやむ事か、人は顔の好い女房を持たせたら足が止まるか、子が生れたら氣が改まるかとも思ふて居たのであらうなれど、たゞ小町と西施と手を引いて来て、衣通姫が舞ひを舞つて見せて呉れても私の放蕩は直らぬ事に極めて置いたを、何で乳くさい子供の顔見て發心が出来ませう、遊んで遊んで遊んで抜いて、呑んで呑んで呑み盡して、家も稼業もそつち除けに箸一本もたぬやうに成つたは一昨今年、お袋は田舎へ嫁入つた姉の處に引取つて貰ひまするし、女房は子をつけて實家へ戻したまゝ音信不通、女の子ではあり惜しいとも何とも思ひはしませぬけれど、其子も昨年の暮チンズに懸つて死んださうに聞きました、女はませぬ物ではあり、死ぬ際には定めし父様とか何とか言ふたので御座りましょ、今年居れば五つになるので御座りました、何のつまらぬ身の上、お話しにも成りませぬ。

男はうす淋しき顔に笑みを浮べて貴嬢といふ事も知りませぬので、飛んだ我まゝの不關法さ、お乗りなされ、お供をしまする、無不意でお驚きなさりましたらう、車を挽くと言ふも名ばかり、何が樂しみに轅棒をにぎつて、何が望みに牛馬の真似をする、錢を貰へたら嬉しいか、酒が呑まれたら愉快なか、考へれば何も彼も悉皆厭やで、お客様を乗せやうが空車の時たらうが

嫌やと成ると用捨なく嫌やに成まする、呆れはてる我ま、男、愛想が盡るでは有りませぬか、さ、お乗りなされ、お供をしますと進められて、あれ知らぬ中は仕方なし、知つて其車に乗れます物か、夫れでも此様な淋しい處を一人ゆくは心細いほどに、廣小路へ出るまで唯道づれに成つて下され、話しながら行ませうとてお關は小襦少し引あげて、ぬり下駄のおと是れも淋しげなり。

昔の友といふ中にもこれは忘れぬ由縁のある人、小川町の高坂とて小奇麗な烟草屋の二人息子、今は此様に色も黒く見られぬ男になつては居れども、世にある頃の唐棧ぞろひに小氣の利いた前だれかけ、お世辭も上手、愛敬もありて、年の行かぬやうにも無い、父親の居た時よりは却つて店が賑やかなと評判された利口らしい人の、さてもくくの替り様、我身が嫁入りの噂聞え初た頃から、やけ遊びの底ぬけ騒ぎ、高坂の息子は丸で人間が變つたやうな、魔でもさしたか、祟りでもあるか、よもや只事では無いと其頃に聞きしが、今宵見れば如何にも淺ましい身の有様、木賃泊りに居なさんすやうに成らうとは思ひも寄らぬ、私は此人に思はれて、十二年より十七まで明暮れ顔を合せる毎に行々は彼の店の彼處へ座つて、新聞見ながら商ひするのと思ふても居たれど、量らぬ人に縁の定まりて、親々の言ふ事なれば何の異存を入られやう、

烟草屋の録さんにはと思へど夫れはほんの子供とら、先方からも口へ出して言ふた事はなし、此方は猶さら、これは取とまらぬ夢の様な戀なるを、思ひ切つて仕舞へ、思ひ切つて仕舞へ、あきらめて仕舞うと心を定めて、今の原田へ嫁入りの事には成つたれど、其際までも涙がこぼれて忘れかねた人、私と思ふほどは此人も思ふて、夫れ故の身の破滅かも知れぬ物を、我が此様な丸鬚などに、取濟したる様な姿をいかにかり面にく、思はれるであらう、夢さらさうした樂しらしい身ではなけれども阿關は振かへつて録之助を見やるに、何を思ふか茫然とせし顔つき、時たま逢ひし阿關に向つて左のみは嬉しき様子も見えざりき。

廣小路を出れば車もあり、阿關は紙入れより紙幣いくらか取出して小菊の紙にまはらしく包み、録さんこれは誠に失禮なれと鼻紙なりとも買つて下され、久し振でも目にかへつて何か申たい事は澤山あるやうなれど口へ出させぬは察して下され、では私は御別れに致します、随分からだを厭ふて煩らはぬ様に、伯母さんをも早く安心させておわけなさりまし、蔭ながら私も祈ります、何うぞ以前の録さんにお成りなされて、お立派にお店をお開きに成ります處を見せ下され、左様ならばと挨拶すれば録之助は紙つゝみを頂いて、お辭儀申す筈なれど貴殿のお手より下されたのなれば、あり難く頂戴して思ひ出たします、お別れ申すが惜しいと言つて

も是れが夢ならば仕方のない事、さ、出なされ、私も歸ります、更けては路が淋しう御座り
ますぞとて空車引いてうしろ向く、其人は東へ、此人は南へ、大路の柳月のかげに靡いて力な
らざるの塗り下駄のよと、村田の二階も原田の奥も憂きは互ひの世にも事多し。

たけくら

(一)

廻れは大門の見返り柳いと長けれど、ち齒ぐろ海に燈火うつる三階の燈も手に取る如く、明
けくれなしの車の荷茶にはかり知られぬ全盛をうらなひて、大音寺前と名は佛々さけれど、
さりとて陽氣の町に住みたる人の申き、三島神社の角をまがりてより是れぞと見ゆる大鳳もな
く、かたぶく軒端の十軒長屋二十軒長屋、商ひはかつぶり利かぬ處まで半さしたる雨戸の外
に、あやしき形に紙を切りなして、胡粉ぬりくり彩色のある田樂みるやう、裏にはりたる申の
さまもをかし、一軒ならず二軒ならず、朝日に干して夕日に仕舞ふ手當ごとくしく、一家内
これにかゝりて夫れは何ぞと問ふに、知らずや霜月酉の日例の神社に欲深様のかつぎ給ふ是れ
ぞ熊手の下ごしらへといふ、正月門松とりまつるよりかゝりて、一年うち通しの夫れは賊の
商賣人、片手むさにも夏より手足を色とりする新年着の支度もこれをば當てぞかし、前無や
大島大明神、買ふ人にさへ大福をわたへ給へば製造もとの我等萬倍の利益をど人ごとくに言ふり

れど、さりとて思ひのほかなるもの、此あたりは大長者のうわさも聞かざりき、往む人の多
は廊下にて良人は小格子の何とやら、下足札そろへてがらんがらん音もいそがしや夕暮より
羽織引かけて立出れば、うしろに切火打かくる女房の顔もこれが見納めか十人きりの側杖無理
情死のしそこね、恨みはかゝる身のはて危ふく、すはと言はい命かけの勤りに遊山らしく見ゆ
るもあかし、娘は大籠の下新造とやら、七軒の何屋が客廻しとやら、提燈さげてちよこちよ
こ走りの修業、卒業して何にかなる、とかくは槍舞臺と見たつるもをかしからずや、垢ぬけの
せし三十あまりの年増、小ざつぱりとせし唐棧ぞろひに紺足袋はきて、雪駄ちやらしく忙がし
げに横抱きの小包はとほでもまるし、茶屋が棧橋とんと沙汰して、廻り遠や此處からあげます
る、眺へ物の仕事やさんと此あたりには言ふぞかし、一體の風俗よそと變りて女子の後帯もち
んとせし人少なく、がらを好みて巾廣の巻帯、年増はまだよし、十五六の小癩なるが酸漿ふく
んで此姿はと目をふさぐ人もあるべし、所が是非もなや、昨日河岸店に何紫の源氏名耳に
殘れど、けふは地廻りの吉と手馴れぬ焼鳥の夜店を出して、身代たゝき骨になれば再び古巢へ
の内儀姿、どこやら素人よりは見よげに覺えて、これに染まらぬ子供もなし、秋は九月仁和賀
の頃の大路を見給へ、さりとて宜くも學びし舞人が物真似、榮喜が所作、孟子の母やちどろか

ん上達の速やかさ、うまいと褒められて今宵も一廻り生息氣は七つ入つよりつりて、やが
ては肩に横手ねぐひ、鼻歌のそり節、十五の少年がませがた恐ろし、學校の唱歌にもぎつち
よんちよんと拍子を取りて、運動會に木やり音頭もなしかねまじき風情、つらでも教有はむ
つかしきに教師の苦心さこそと思はるゝ入谷ちかくに育英舎とて、私立なれども生徒の数は千
人近く、狭き校舎に目白押の窮屈さも教師が人望いよくあらはれて、唯學校と一口にて此
あたりには呑込みのつくほど成るがあり、通ふ子供の數々に或は火消商人足、ちどつさんは
勿橋の番屋に居るよと習はずして知る其道のかしこさ、梯子のりのまねびにアソ忍びがへしを
折りましたと訴へのつへこへ、三百といふ代官の子もあるべし、お前の父さんは馬だねへと首
はれて、名のりや怒らき子心にも顔あからめるしはらしさ、出入りの貸座敷の秘藏息子寮住居
に華族さまを氣取りて、ふさ付き帽子面もちゆたかに洋服かるゝと花々敷を、坊ちやん坊ち
やんとて此子の追従するもをかし、多くの中に龍華寺の信知とて、千筋となづる黒髪も今いく
歳のさかりにか、やがては墨染にかへぬへき袖の色、發心は腹からか、坊は親ゆづりの勉強も
のあり、性來をとなしきを友達いふせく思ひて、さまざまの悪戯をしかけ、猫の死骸を細にく
しりてち役目なれば引導をたのみますと投げつけし事も有りしが、それは昔、今は校内二の人

とて假にも侮りての所業はなかりき、歳は十五、並脊にていしが栗の頭髮も思ひなしか俗とは變りて、藤本信如と訓にてすませど、何處やら釋といひたげの素振なり。

(二)

八月廿日は千束神社のまつりとして、山車屋盛に町々の見得をはりて土手をのぼりて廊内までも入込まんづ勢ひ、若者が氣組み思ひやるべし、聞かぢりに子供とて由断のなりがたき此あたりになれば、そろひの浴衣は言はでものこと、銘々に申合せて生意氣のありたけ、聞かば膽もつぶれぬべし、横町組と自らゆるしたる亂暴の子供大將に、頭の長とて歳も十六、仁和賀の金棒に親父の代理をつとめしより氣位えらく成りて、帯は腰の先に、返事は鼻の先にていふ物と定め、にくらしき風俗、あれが頭の子でなくばと商人足が女房の蔭口に聞えぬ、心一ぱいに我がまゝを徹して身に合はぬ巾をも廣げしが、表町に田中屋の正太郎とて歳は我れに三つ劣れど、家に金あり身に愛敬あれば人も憎くまぬ當の敵あり、我れは私立の學校へ通ひしと、先方は公立なりとて同じ唱歌も本家のやうな顔をしある、去年も一昨年も先方には大人の末社がつきて、まつりの趣向も我れよりは花を咲かせ、喧嘩に手出しのなりがたき仕組も有りき、今

年又もや負けにならば、離れだと思ふ横町の長吉だぞと平常の力だては空いばりどけなされて、辨天ばりに水あよぎの折も我が組に成る人は多かるまじ、力を言はば我が方がつよけれど、田中屋が柔和ぶりにごまかされて、一つは學問が出来あるを恐れ、我が横町組の太郎吉、三五郎など、内々は彼方がたに成たるも口惜し、まづつりは明後日、いよく我が方が負け色と思見えたらば、破れかぶれに暴れて暴れて、正太郎が面に疵一つ、我れも片眼片足なきものと思へば爲やすし、加擔人は車屋の丑に元結よりの女、手遊屋の彌助などあらば引けは取るまじ、あゝ夫よりは彼の人の事彼の人の事、藤本のならば宜き智慧も貸してくれんと、十八日の暮れちかく、物いへば眼口にうるさき蚊を拂ひて竹村しげき龍華寺の庭先から信如が部屋へのそりのそりと、信さん居るかど顔を出しぬ。

己れの爲る事は亂暴だど人がいふ、亂暴かも知れないが口惜しい事は口惜しいや、なあ聞いてくれ信さん、去年も己れが處の末弟の奴と正太郎組の短小野郎と萬燈のたゝき合ひから始まつて、夫れといふと奴の仲間がばらばらと飛出しやあがつて、どうたらう小さな者の萬燈を打ちわしちまつて、胴揚にしやがつて、見やがれ横町のさまをど一人がいふと、間拔に脊のたかい大人のやうな面をして居る團子屋の頼馬が、頭もあるものか、尻尾だ尻尾だ、豚の尻尾だな

んで悪口を言つたとき、己らお其時千束様へぬり込んで居たもんだから、あとで聞いた時に直様仕かへしに行かうと言つたら、親父さんに頭から小言を喰つて其時も泣寝入、一昨年はそれね、お前も知つてる通り筆屋の店へ表町の若衆が寄合て茶番か何かやつたらう、あの時己らが見に行つたら、横町は横町の趣向がありませうなんて、おつな事を言ひやがつて、正太ばかり客にしたのも胸にあるわな、いくら金があるもつて質屋のくづれの高利貸が何たら様だ、彼んな奴を生して置くより擲きこらす方が世間のためだ、己らお今度のまつりには如何しても亂暴に仕掛けて取かへしを付けようと思ふよ、だから信さん友達にひに、夫れはお前が嫌やだといふのも知れてるけれども何卒我れの肩を持つて、横町組の耻すいぐのだから、ね、お、本家本元の唱歌だなんて威張り、ある正太郎を取ちめて呉れないか、我れが私立の腰ぼけ生徒といはれしはお前の事も同然だから、後生だ、どうぞ、助けると思つて大萬燈を振廻しておくれ、己れは心から底から口惜しくつて、今度負けたら長吉の立端は無いと無茶にくやしがつて大幅の肩をゆすりぬ。だつて僕は弱いもの。弱くても宜いよ。万燈は振廻せないよ。振廻さなくても宜いよ。僕が遣入ると負けるが宜いか。負けても宜いよ。夫れは仕方が無いと諦めるから、お前は何も爲ないで宜いから唯横町の粗だといふ名で、威張つてさ、呉れると素氣に人氣がつ

ぐがられ、己れは此様な無學漢だのにお前は學が出来からぬ、向ふの奴が漢語か何かで冷嘲でも言つたら、此方も漢語で仕かへしておくれ、あ、好い心持ださつぱりしたお前が承知してくれ、は最う千人力だ、信さん有がたうと常に無い優しき言葉も出るものなり。一人は三尺帯に突かけ草履の仕事師の息子、一人はかわ色金巾の羽織に紫の兵子帯といふ坊様仕立、思ふ事はうらはらに、話しは常に喰ひ違ひがちなれど、長吉は我が門前に産聲を揚げるしものど大和尚夫婦が最負もあり、同じ學校へかよへば私立私立とけなされるも心おわるきに、元來愛敬のなき長吉なれば心から味方につく者もなき憐れさ、先方は町内の若衆どもまで尻押をして、ひがみでは無し長吉が負けを取る事柄は田中屋がたに少なからず、見かけて頼まれし義理としても嫌やとは言ひかねて信如、夫れではお前の組に成るさ、成るといつたら嘘は無いが、成るべく喧嘩は爲ぬ方が勝だよ、いよ、先方が賣りに出たら仕方が無い、何いさと言へば田中の正太郎位小指の先さ、「我が力の無いは忘れて、信如は机の引出しから京都みやげに貰ひたる、小鍛冶の小刀を取出して見すれば、よく利れそうだね」と覗き込む長吉が顔、あぶなし此物を振廻してなる事か。

解かば足にもとくべき毛髪を、根あがり堅くつめて前髪大きく鬚もたげの、結髪といふ名は恐ろしけれど、此髪を此頃の流行とて真家の令嬢も遊ばさるゝぞかし、色白に鼻筋とほりて、口もとほ小さからねど締りたれば醜くからず、一つ一つに取たて、は美人の鑑に遠けれど、物いふ聲の細く清しき、人を見る目の愛嬌あふれて、身のこなしの活々したるは、快き物なり、柿色に蝶鳥を染めたる大形の浴衣きて、黒縹子と染分絞りの晝夜帯胸だかに、足にはねり木履こしらわたりにも多くは見かけぬ高きをはきて、朝湯の歸りに首筋白々と手拭さげたる立姿を、今三年の後に見たしと廊がへりの若者は申き、大黒屋の美登利とて生國は紀州、言葉のいさゝか詭れるも可愛く、第一は切れ離れよき氣象を喜ばぬ人なし、子供に似合ぬ銀貨入れの重きも道理、姉なる人が全盛の餘波、延びては遣手新造が姉への世辭にも、美いちやん人形をお買ひなされ、これはほんの手鞠代と、呉れるに恩を着せねば貰ふ身の有がたくも覺えず、まきはまきは、同級の女生徒二十人に揃ひのこむ鞠を與へしはあろかの事、馴染の筆やに店さらしの手遊を買しめて、喜ばせし事もあり、さりとて日々夜々の散財此歳この身分にて叶

ふべきにあらず、末は何となる身ぞ、両親ありながら大目に見てあらし詞をかけたる事も無く、横の主が大切がる様子も怪しきに、聞けば養女にもあらず親戚にてはもとより無く、姉なる人が身賣りの當時、鑑定に來たりし横の主が誘ひにまかせ、此地に活計もとむとて親子三人が旅衣、たち出しは此際、それより與は何なれや、今は寮のあづかりをして母は遊女の仕立物、父は小格子の書配に成りぬ、此身は遊藝手藝學校にも通はせられて、其はうは心のまゝ、半日は姉の部屋、半日は町に遊んで見聞くは三味に太鼓にわけ紫のなり形、はじめ藤色絞りの半襟を拾にかけて着て歩るまじに、田舎物いなか者と町内の娘どもに笑はれしを口惜しがりて、三日三夜泣きつゞけし事も有しが、今は我れより入々を嘲りて、野暮な姿と打つけに悪まれ口を言ひ返すものも無く成りぬ。二十日はお祭りなれば心一ぱい面白の事をしてと友達のをむに趣向は何なりと各自に工夫して大勢の好い事な好いでは無いか、幾金でもい、私が出すからとて例の通り勘定なしの引受けに、子供仲間の女王様又とあるまじき恵みは大人よりも利きが早く、茶番にしよう、何處のか店を借りて往來から見えるやうにしてと一人が言へば、馬鹿を言へ、夫れよりはち神輿をこしらへてお呉れな、蒲田屋の奥に飾つてあるやうな本當のを、重くても構はしなら、やのちよらやのちよら舞なしたと給お鉢巻する男子のそばから、夫れでは私

たちが詰らない、昔が騒々を見るばかりでは美登利さんだとして面白くはあらず、何でも前の
 の好物におしよと、女の一むれは祭りを振きに常盤座をと、言いたげの口振をかき、田中の
 正太は何愛らしい眼をぐるぐる動かし、幻燈にしないか、幻燈に、己れの處にも少しは有
 るし、足りないのを美登利さんに買つて貰つて、筆やの店で行かうでは無いか、己れが映じ人
 で横町の三五郎に口上を言はせよう、美登利さん夫れにしないかと言へば、あゝ夫れは面白
 からう、三ちゃんも口上ならば離れも笑はずには居られまい、序にあの顔がうつると猶も
 しるいと相談はどこのひて、不足の品を正太が買物役、汗に成りて飛び廻るもをかしく、いよ
 々明日と成りては横町までも其沙汰聞えぬ。

(四)

打つや鼓のまらへ、三味の音色に事かゝぬ嬉處も、祭りは別物、酉の市を除けては二年一度の
 賑ひぞかし、三島さま小野照さま、お隣社づから負けまじの競ひ心をかしく、横町も表も揃
 ひは同じ真岡木綿に町名くつしと、去歲よりは好からぬ形ぞつゞやくも有りし、口なし染の麻
 だすき成るほど太きを好みて、十四五より以下なるは、蓮華、木兎、犬はり子、さまぐの手

遊を數多きほど見得にして、七つ九つ十一つくるもあらず、大鈴小鈴音中にならつたかせて、驅け
 出す足袋はだしの勇ましく可笑し、群れを離れて田中の正太が赤筋入りの印半天、色白の首筋
 に紺の肌かけ、さりとはい見なれぬ粉粧ともふに、しごいて締めし帯の水淺黄も、見よや縮緬
 の上染、襟の印のわがりも際立て、うしろ鉢巻きに山車の花二枝、草緒の雪駄あとのみはず
 れど、馬鹿ばやしの仲間には入らざりき、夜宮は事なく過ぎて今日一日の日も夕ぐれ、筆やが
 店に寄合しは十二人、一人かけたる美登利が夕化粧の良さに、未だか未だかと正太は門へ出つ
 入りつして、呼んで來い三五郎、お前はまた大黒屋の寮へ行つた事があるまい、庭先から美登
 利さんと言へば聞える筈、早く、早くと言ふに、夫れならば己れが呼んで來る、萬燈は此處へ
 あづけて行けば離れも蠟燭ぬすむまい、正太さん番をたのむとあるに、各畜な奴め、其手間で
 早く行けど我が年したに叱かれて、あつと來たさの次郎左衛門、今の間とかけ出して章駄天
 とはこれをや、あれ彼の飛びやうが可笑しいとて見送りし女子どもの笑ふも無理ならず、横ぶ
 どりして背ひく、頭の形は才樵とて首みさかく、振むけての面を見れば出鱈目の獅子鼻、反
 齒の三五郎といふ仇名もふべし、色は論なく黒きに感心なは目つき何處までもどけて雨の
 頬に笑くばの愛敬、目かくしの福笑ひに見るやうな眉のつき方も、さりとはいどかしく罪の無き

子なり、貧なれや阿波ちりみの筒袖、己れは揃ひが間に合はなんだと知らぬ友には言ふぞかし
我れを頭に六人の子供を、養ふ親も頼棒にすがる身なり、五十軒によき得意場は持たたりども、
内證の車は商買もの、外なれば詮なく、十三になれば片腕と一昨年より並木の活版所へも通
ひしが、怠惰ものなれば十日の辛棒つゝかず、一月と同じ職も無くて霜月より春へかけては
突羽根の内職、夏は検査場の氷屋が手傳ひして、呼聲をかしく客を引くに上手なれば、人に
は調法がられぬ、去年は仁賀和の盛引きに出しより、友達いやしがりて萬年町の呼名今に残れ
ども、三五郎といへば滑稽者と承知して憎くむ者の無きも一徳なりし、田中屋は我が命の綱、
親子が蒙むる御恩すくなからず、日歩どかや言ひて利金安からぬ借りなれど、これなくてはの
金主様おだには思ふべきや、三公己れが町へ遊びに来いと呼ばれて嫌やとは言はれぬ義理あり
されども我れは横町に生れて横町に育ちたる身、住む地處に龍華寺のもの、家主は長吉が親な
れば、表むき彼方に背く事かなはず、内々に此方の用をたして、にらまるゝ時の役廻りつらし
正太は筆やの店へ腰をかけて、待つ間のつれづれに忍ぶ戀路を小聲にうたへば、あれ由断がな
らぬと内儀さまに笑はれて、何がなしに耳の根あかく、まぢくないの高聲に皆も来いと呼つれ
て表へへ驅け出す出合頭、正太は夕飯なせ喰へぬ遊びに響けて先刻にから呼ぶをも知らぬか

誰様も又のちほど遊ばせて下され、これは御世話と筆やの妻にも挨拶して、祖母が自からの迎
ひに正太いやが言はれず、其まゝ連れて歸らるゝあとは俄かに淋しく、人数は左のみ變らぬと
彼の子が見えぬば大人までも寂しい、馬鹿さわざもせぬば申談も三ちやんの様では無けれど、
人好きのするは金持の息子さんに珍らしい愛敬、何と御覽じたか田中屋の後家さまがいやし
さを、あれで年は六十四、白粉をつけぬがめつけ物なれど丸鬚の大きき、猫なで聲して人の死
ぬをも構はず、大方臨終は金と情死なざるやら、夫れでも此方どもの頭の上らぬは彼の物の御
威光、さりとては欲しや、邸内の大きい樓にも大分の貸付があるらしう聞きましたと、大路上に立
ちて二三人の女房よその財産を數へぬ。

(五)

待つ身につらき夜半の置炬燵、それは戀ぞかし、吹風すししき夏の夕ぐれ、ひるの暑さを風呂
に流して、身じまいの姿見、母親が手づからそゝけ髪つくりひて、我が子ながら美しくしきを立
ちて見、居て見、首筋が薄かつたと猶ぞいひける、單衣は水色友仙の涼しげに、白茶金らんの
丸帯少し幅の狭いを結ばせて、庭石に下駄直すまで時は移りぬ。まだかまたかど塀の廻りを七

度び廻り、欠伸の數も盡きて、拂ふとすれど名物の蚊に首筋額をわした、か整れ、三五郎弱り
 きたる時、美登利立出で、いざと言ふに、此方は言葉もなく袖を捉へて驅け出せば、息がはつひ
 胸が痛い、そんなに急ぐならば此方は知らぬ、お前二人でお出と怒られて、別れ別れの到着、
 筆やの店へ來し時は正太が夕飯の最中とおぼえし。あゝ面白くない、あもしろくない、彼の人
 が來なければ幻燈をはじめの嫌、伯母さん此處の家に智慧の板は賣りませぬか、十六武藏
 でも何でもよい、手が眼で困ると美登利の淋しがれば、夫れよと即坐に鉢を借りて女子づれば
 切抜きにかゝる、男は三五郎を中に仁和賀のさらひ、北廊全盛見わたせば、軒は提燈電氣燈
 いつも賑はふ五丁町と、諸聲をかしくはやし立つるに、記憶のよければ去年一昨年とさかのぼ
 りて、手振手拍子ひとつも變る事なし、うかれ立たる十人あまりの騒ぎなれば何事と門に立て
 人垣をつくりし中より、三五郎は居るか、一寸來くれ大急ぎだど、文次といふ元結よりの呼に、
 何の用意もなくはいしよ、よし來と身がるに敷居を飛こゆる時、此二ッ股野郎覺悟をしろ、横
 町の面よごしめ唯は置かぬ、誰だと思ふ長吉だ生ふさけた真似をして後悔するなと頬骨一撃、
 あつと魂撃て逃入る襟がみを、つかんで引出す横町の二むれ、それ三五郎をたゞき殺せ、正太
 を引出してやつて仕舞へ、弱虫にげるな、團子屋の頼馬も唯は置ぬと潮のやうに沸かへる騒ぎ、

4

筆屋の軒の掛提燈は苦もなくたゞき落されて、釣らんふ危なし店先の喧嘩なりませぬと女房が
 喚きも聞ばこそ、人數は大凡十四五人、ぬち鉢巻に大高燈ふりたて、當るがまゝの亂暴狼藉、
 土足に踏込む傍若無人、目ざす敵の正太が見えねば、何處へ隠した、何處へ逃げた、さあ言は
 ぬか、言はぬか、言はさず置く物かと三五郎を取こめて撃つやら蹴るやら、美登利くやくしく
 止める人を掻きのけて、これお前がたは三ちゃんに何の咎がある、正太さんと喧嘩がしたくば
 正太さんとしたが宜い、逃げもせねば隠くしもしない、正太さんは居ぬでは無いか、此處は私
 が遊び處、お前がたに指でもさしはせぬ、さゝ憎くらし長吉も、三ちゃんを何故ぶつ、あ
 れ又引たはした、意趣があらば私をお撃ち、相手には私がある、伯母さん止めずに下されと身
 もだへして罵れば、何を女郎め類桁たゞく、姉の跡つきの乞食め、手前の相手にはこれが相應
 だど多人數のうしろより長吉、泥草鞋つかんで投つけば、ねらひ違はず美登利が額際にもさ
 き物したゝか、血相かへて立あがるを、怪我でもしてはと抱きとむる女房、さまを見る、此方
 には龍華寺の藤本がついて居るぞ、仕かへしには何時でも來り、薄馬鹿野郎め、弱虫め、腰ね
 けの活地なしめ、歸りには待伏せする、横町の間に氣をつけると三五郎を土間に投出せば、折
 から靴音たれやらが交番への注進今ぞしる、それと長吉聲をかくれれば丑松文次その餘の十餘人、

方角をかへてはら〜と逃足はやく、抜け裏の露路にかゝるも有るべし。口惜しいくやしい口惜しい口惜しい、長吉め文次め丑松め、なぜ己れを殺さぬ、殺さぬか、己れも三五郎だ唯死ぬものか、幽霊になつても取殺すぞ、覺えて居る長吉めと湯玉のやうな涙をばら〜、はては大聲にあつと泣き出す、身内や痛からん筒袖の處々引さかれて背中も腰も砂まぶれ、止めるにも止めかねて勢ひの懐まじさに唯ちど〜と氣を吞まれし。筆やの女房走り寄りて抱きあこし、背中をなで砂を拂ひ、堪忍をし、堪忍をし、何と思つても先方は大勢、此方は皆よわい者ばかり、大人でさへ手が出しかねたに叶はぬは知れて居る、夫れでも怪我のないは仕合、此上は途中の待ぶせが危ない、幸ひの巡査さまに家まで見て頂かば我々も安心、此通りの仔細で御座ります故と筋をあら〜折からの巡査に語れば、職掌がら〜送らんと手を取らるゝに、いそ〜送つて下さらずとも歸ります、一人で歸りますと小さく成るに、こりや怕い事は無い、其方の家まで送る分の事、心配するなと微笑を合んで頭を撫でらるゝに彌々ちいみて、喧嘩をしたと言ふと親父さんに叱られます、頭の家は大屋さんで御座りますからとて測れるをすかして、さらば門口まで送つて遣る、叱からるゝやうの事は爲ぬわとて連れらるゝに四隣の人胸を撫で、はるかに見送れば、何とかしけん横町の角にて巡査の手をば振はなして一目散に逃げぬ。

(一八)

めづらしい事、此炎天に雪が降りせぬか、美登利が學校を嫌やがるはよく〜の不機嫌、朝飯がすゝまずば後刻に船でも眺〜ようか、風邪にしては熱も無ければ大方きのふの疲れと見える、太郎様への朝参りは母さんが代理してやれば御免こふむれとありしに、いそ〜姉さんの繁昌するやうにと私が願をかけたのなれば、参らねば氣が濟まぬ、お賽銭下され行つて來ますと家を驅け出して、中田圃の稻荷に門口ならして手を合せ、願ひは何ぞ行きも歸りも首うなだれて睦道づたひ歸り來る美登利が姿、それと見て遠くより聲をかけ、正太はかけ寄りて袂を押へ、美登利さん昨夜は御免よと突然にあやまれば、何もお前に謝罪られる事は無い。夫れでも己れが憎くまれて、己れが喧嘩の相手だもの、お祖母さんが呼びにさへ來なければ歸りはしない、そんなに無暗に三五郎をも撃たしはしなかつた者を、今朝三五郎の處へ見に行つたら、彼奴も泣いて口惜しがつた、己れは聞いてさ〜口惜しい、お前の顔へ長吉め草履を投げたと言ふでは無いか、彼の野郎亂暴にもほどがある、だけれど美登利さん堪忍して呉れよ、己れは知りながら逃げて居たのでは無い、飯を掻込んで表へ出やうとするとお祖母さんがお湯に行くど

いふ、留守居をして居るうちの騒ぎだらう、本當に知らなかつたのだからねと、我が罪のやうに平あやまりに謝罪で、痛みはせぬかと額際を見あげれば、美登利につこり笑ひて何負傷をするほどでは無い、夫れだが正さん誰れが聞いても私が長吉に草履を投げられたと言つてはいけなうよ、もし萬一お母さんが聞きでもすると私が叱られるから、親でさへ頭に手はあげぬものを、長吉づれが草履の泥を額にぬられては踏まれたも同じだからとて、背ける顔のいとしく、本當に堪忍しておくれ、みんな己れが悪い、だから謝る、機嫌を直して呉れないか、お前に怒られると己れが困るものをと話しつれて、いつしか我家の裏近く来れば、寄らないか美登利さん、離れも居はしない、祖母さんも日がけを集めにいたらうし、己ればかりで淋しくてならない、いつか話した錦繪を見せるからお寄りな、種々のがあるからと袖を捉らへて離れぬに美登利は無言にうなづいて、佗びた折戸の庭口より入れれば、廣からぬとも、鉢ものをかしく並びて、軒につり忍艸、これは正太が午の日の買物と見えぬ、理由しらぬ人は小首をかたぶけん。町内一の財産家といふに、家内は母祖と此子二人、萬の鍵に下腹冷えて留守は見渡しの總長屋、流石に鏡前くたくもあらざりき、正太は先へわがりて風入りのよき塙處を見たり、此處へ來ぬかと團扇の氣あつかひ、十三の子供にはませ過ぎてをかし。古くより持つたへし錦繪

かすく取出し、寝めらるゝを嬉しく美登利さん昔しの羽子板を見せよと、これは己れの母さんがお邸に奉公して居る頃いたいたのだとさ、をかしいでは無いか此大きい事、人の顔も今のとは違ふね、あゝ此母さんが生きて居ると宜いが、己れが三つの歳死んで、お父さんは在るけれど田舎の實家へ歸つて仕舞たから今に祖母さんばかりさ、お前は浦山しぬと無端に親の事を言ひ出せば、それ繪がぬれる、男が泣く物では無いと美登利に言はれて、己れは氣が弱いのかしら、時々種々の事を思ひ出すよ、また今時分は宜いけれど、冬の月夜なにかに田町あたりを集めに廻ると土手まで来て幾度も泣いた事がある、何さむい位で泣きはしない、何故だか自分も知らぬが種々の事を考へるよ、あゝ一昨年から己れも日がけの集めに廻るさ、祖母さんは年寄りだから其うちにも夜は危ないし、目が悪るゝから印形を押たり何かに不自由だからね、今まで幾人も男を使つたけれど、老人に子供だから馬鹿にして、思ふやうには動いて呉れぬと祖母さんが言つて居たつけ、己れが最う少し大人に成ると質屋を出さして、昔しの通りでなくとも田中屋の看板をかけるよ、他處の人は祖母さんを各だと言ふけれど、己れの爲に儉約して呉れるのだから氣の毒でならない、集金に行くうちでも通新町や何かに随分可愛想なのが有るから、無お祖母さんを悪るゝいふだらう、夫れを考へると己れは涙が

こぼれる、矢張り氣が弱いのだね、今朝も三公の家へ取りに行つたら、奴め身體が痛い癖に親父に知らずまいとして働いて居た、夫れを見たら己れは口が利けなかつた、男が泣くてゝのは可笑しいでは無いか、だから横町の野番漢に馬鹿にされるのだと言ひかけて我が弱いを耻かしさうな顔色、何心なく美登利と見合す目つきの可愛さ。お前の祭の姿は大層よく似合つて浦山しかつた、私も男だと彼んな風がして、見たい、誰れよりも宜く見えたと賞められて、何だ己れなんぞ、お前そこ美しくいや、廊内の大卷さんよりも奇麗だと皆がいふよ、お前が姉であつたら己れは何様に肩身が廣かろう、何處へゆくにも追従て行つて大威張りに威張るがな、一人も兄弟が無いから仕方が無いね、美登利さん今度一處に寫眞を取らないか、我れは祭りの時の姿で、お前は透枝のあら縞で意氣な形をして、水道尻の加藤でうつつさう、龍華寺の奴が浦山しがるやうに、本當だぜ彼奴は蛇度怒るよ、眞青に成つて怒るよ、にえ肝だからね、赤くはならない、夫れども笑ふかしら、笑はれても構はない、大きく取つて看板に出たら宜いな、お前は嫌やかへ、嫌やのやうな顔だものど恨めるもをかし、變な顔にうつるとお前に嫌はれるからとて美登利ふき出して、高笑ひの美音に御機嫌や直りし。

美登利の日記

燈籠ながして、お魚追ひますよ、池の橋が直つたれば怖い事は無いと言ひ捨てに立出る美登利の姿、正太うれしげに見送つて美しくしと思ひぬ。

(七)

龍華寺の信如、大黒屋の美登利、二人ながら學校は育英舎なり、去りし、四月の末つかた櫻は散りて青葉のかけに藤の花見といふ頃、春季の大運動會とて水の谷の原にせし事ありしが、つな引、鞠なげ、細とびの遊びに興をそへて長き日の暮るゝを忘れし、其折の事とや、信如いかにしたるか平常の沈着に似ず、池のほとりの松が根につまづきて赤土道に手をつきたれば、羽織の袂も泥に成りて見にくかりしを、居あはせたる美登利みかねて我が紅の絹はんげちを取出し、これにてお拭きなされと介抱をなしけるに、友達の中なる嫉妬や見つけて、藤本は坊主のくせに女と話をして、嬉しさうに禮を言つたは可笑しいでは無いか、大方美登利さんは藤本の女房になるのであらう、お寺の女房なら大黒さまと言ふのだなど、取沙汰しける、信如元來かゝる事を人の上に聞くも嫌ひにて、苦き顔して横を向く質なれば、我が事として我慢のなるべきや、夫れよりは美登利といふ名を聞くことに恐ろしく、又あの事を言ひ出すかと胸の中もや

くやして、何とも言はれぬ厭やな氣持なり、さりながら事ごとくに怒りつける譯にもゆかねば、成るだけは知らぬ體をして、平氣をつくりて、むづかしき顔をして遣り過ぎる心なれど、さし向ひて物などを問はれたる時の當惑さ、大方は知りませぬの一言にて済ませど、苦しき汗の身うちを流れて心ぼそき思ひなり、美登利はさる事も心にとまらねば、最初は藤本さん藤本さんと親しく物いひかけ、學校退けての歸りがけに、我れは一足はやくて道端に珍らしき花などを見つければ、おくれし信如を待合して、これ此様うつくしい花が咲いてあるに、枝が高くて私には折れぬ、信さんは背が高ければ、手が届きまじよ、後生折つて下されど一むれの中にては年長なるを見つけて頼めば、流石に信如袖ふり切りて行ずる事もならず、さりとして人の思はくいよゝ愁られければ、手近の枝を引寄せて好悪かまはず申譯ばかりに折りて、投つけるやうにすたすたと行過ぎるを、さりとは愛敬の無き人と憫れし事も有しが、度かさなりての末には自ら故意の意地悪のやうに思はれて、人には左もなきに我れにはかり愁らき所爲をみせ、物を問へば碌な返事した事なく、傍へゆけば逃げる、はなしを爲れば怒る、陰氣らしい氣のつまり、どうして好いやら機嫌の取りやうも無い、彼のやうなこつつかしやは思ひのまゝに捨てて怒つて意地はるが爲たいならんに、友達と思はずは口を利くも入らぬ事と美登利少し瘡にさは

りて、用の無ければ摺れ違ふても物いふた事なく、途中に逢ひたりとて挨拶など思ひもかけず、唯いつとなく二人の中に大川一つ横たはりて、舟も筏も此處には御法度、岸に添ふてももひもひの道をあゝるまぬ。

祭りは昨日に過ぎて其わくる日より美登利の學校へ通ふ事ふつと跡たえしは、問ふまでも無く額の泥の洗ふても消えがたき耻辱を、身にしみて口惜しければぞかし、表町とて横町とて同じ敷場に申し並べば朋輩に變りは無き筈を、をかしき分け隔てど常日頃意地を持ち、我れは女の、とても敵ひがたき弱味をば付目にして、まつりの夜の所爲はいかなる、卑怯ぞや、長吉のわからずやは誰れも知る亂暴の上なしなれど、信如の尻も無くは彼れほどに思ひ切りて表町をば暴し得じ、人前をば物議らしく温順につくりて、陰に廻りて機械の糸を引きしは藤本の仕業に極まりぬ、よし級は上にせよ、學は出来るにせよ、龍華寺さまの若旦那にせよ、大黒屋の美登利紙一枚のお世話にも預からぬ物を、あのやうに乞食呼はりして貰ふ恩は無し、龍華寺は何ほど立派な植家ありと知らねど、我が姉さま三年の馴染に銀行の川様、兜町の米様もあり、議員の短小さま根曳して奥さまにと仰せられしを、心意氣氣に入らねば姉さま嫌ひてお受けはせざりしが、彼の方とても世には名高きち人と選手衆の言はれし、嘘ならば聞いて見よ、大黒やに

大巻の居ずば彼の櫻は闇とかや、されば店の日那とても父さん母さん我が身を粗略には遊ばさず、常々大切がりて床の間に据へなされし瀬戸物の大黒様をば、我れいつぞや座敷の中心にて羽根つくとして騒ぎし時、同じく並びし花瓶を仆し、散々に破損をさせしに、旦那の間に御酒めし上りながら、美登利と轉婆が過ぎると言はれしばかり小言は無かりき、他の人ならば一通りの怒りでは有るまじと、女子衆達にあとくまで羨れしも、必竟は姉さまの威光ぞかし、我れ寮住居に人の留守居はしたりとも姉は大黒屋の大巻、長吉風情に負けを取るべき身にもあらず、龍華寺の坊さまにいぢめられんは心外と、これより學校へ通ふ事もしろからず、我まゝの本性あなどられしが口惜しさに、石筆を折り墨をすて、書物も十露盤も入らぬ物にして、中よき友と埒も無く遊びぬ。

(八)

走れ飛ばせの夕べに引かへて、明けの別れに夢をのせ行く車の淋しさよ、帽子まぶかに人目を厭ふ方様もあり、手拭とつて頬かぶり、彼女が別れに名残の一翠、いたと身にしみて思ひ出すほど嬉しく、うす氣味わるやにたにたの笑ひ顔、坂本へ出ては用心し給へ千住がへりの青物車

に足元あぶなし、三島様の角までは氣違ひ街道、御顔のしまり何れも緩るみて、はかりながら御鼻の下ながく見ゆさせ玉へば、そんな其處らに夫れ大した御男子様とて、分厘の價値も無しと、辻に立ちて御慮外を申もありけり、楊家の娘君龍をうけてと長恨歌を引出すまでもなく、娘の子は何處にも貴重がるゝ頃なれど、此あたりの裏屋より赫奕姫の生るゝ事との例多し、築地の某屋に今は根を移して御前さま方の御相手、踊りに妙を得し雪といふ美形、唯今のお座敷にてお米のなります木はと至極あどけなき事は申とも、もとは此所の巻帯帯にて花がるたの内職せしものなり、評判は其頃に高く去るもの日々に疎ければ、各物一つかけを指して二度目の花は紺屋の乙娘、今千束町に新つた屋の御神燈ほのめかして、小吉と呼ぶる、公圖の尤物も根生ひは同じ此處の土成し、あけくれの噂にも御出世といふは女に限りて、男は塵塚さがす黒斑の尾の、ありて用なき物とも見ゆべし、此界限に若い衆と呼ぶる、町並の息子、生意氣さかりの十七八より五人組七人組、腰に尺八の伊達はなけれど、何とやら殿めしき名の親分が手下につきて、揃ひの手ぬぐひ長提燈、賽ころ振る事おぼえぬうちは紫見の格子先に思ひ切つての申談も言ひがたしとや、真面目につとむる我が家は晝のうちばかり、一風呂浴びて日の暮れゆけば突かけ下駄に七五三の着物、何屋の店の新妓を見たか、金杉の糸屋が娘に似

て最う一倍鼻がひくいと、頭腦の中を此様な事にこしらへて一軒ごとの格子に烟草の無理どり
 鼻紙の無心、打ちつ打たれつ是れを一世の譽と心得れば堅氣の家の相續息子地廻りと改名して、
 大門際に喧嘩かひと出るもありけり、見よや女子の勢力と言はぬばかり、春秋しらぬ五丁町の
 賑ひ、送りの提燈いさ流行らねど、茶屋が廻女の雪駄のおとに響き通へる歌舞音曲うかれうか
 れて入込む人の何を目當に言問はれ、赤毛り赫熊に稱徳の褌ながく、につと笑ふ口元目もと、
 何處が美いとも申がたけれど華魁衆とて此處にての敬ひ、立はなれては知るによしなし、か
 る中にて朝夕を過せば、衣の白地の紅に染む事無理ならず、美登利の眼の中に男といふ者さ
 つても怕からず恐ろしからず、女郎といふ者さのみ賤しき勤めとも思はぬは、過ぎし故郷を出
 立の當時ないて姉をば送りしこと夢のやうに思はれて、今日此頃の全盛に父母への孝養うらや
 ましく、お職を徹す姉が身の、憂いの愁らしいの数も知らねば、まぢら人戀ふる鼠なき格子の咒文、
 別れの背中に手加減の秘密まで、唯ちもしろく聞なされて、廊ごとばを町にいふまで去りとは
 耻かしからず思へるも哀なり、年はやうく數への十四、人形抱いて頬ずりする心は御華族の
 お姫様とて變りなけれど、修身の講義、家政學のいくたても學びしを學校にてばかり、賦あけ
 くれ耳に入りしは好いた好かぬの客の風説、仕着せ積み夜具茶屋への行わたり、派手は美事に、

かなはぬは見すばらしく、人事我事分別をいふはまた早し、幼な心に目の前の花のみはしるく、
 持まへの負けじ氣性は勝手に馳せ廻りて雲のやうな形をこしらへぬ、氣違ひ街道、腰掛け道、
 朝がへりの殿がた一順すみて朝寝の町も門の帯目青海波をそかき、打水よきほどに濟みし表町
 の通りを見渡せば、来るは来るは、萬年町山伏町、新谷町あたりを購にして、一能一術これも
 藝人の名はのがれぬ、よかく餘や輕業師、人形つかひ大神樂、住吉をどりに角兵衛獅子、お
 もひちもひの粉粧して、縮緬透綾の伊達もあれば、薩摩がすりの洗ひ着に黒縞子の幅狹帯、よ
 き女もあり、男もあり、五人七八十人一組の大たむろもあれば、一人淋しき瘦せ老爺の破れ三
 味線かへて行くもあり、六つ五つなる女の子に赤襪させて、あれは紀の國ちどらするも見ゆ
 お顧客は廊内に居つゞけ客のなぐさみ、女郎の憂さ晴らし、彼處に入る身の生涯やめられぬ得
 分ありと知られて、来るも来るも此處らの町に細かき貫心を心に止めず、裾に海草のいか
 はしき乞食さへ門には立たず行過るぞかし、容貌よき女太夫の笠にかくれぬ床しの頬を見せな
 がら、喉自慢、腕自慢あれ、彼の聲を此町には聞かせぬが憎くしと筆やの女房舌うちして言
 は、店先に腰をかけて往來を眺めし湯がへりの美登利、はらりと下る前髪の毛を黄楊の髮櫛に
 ちやつと掻きあげて、伯母さんあの太夫さん呼んで来ませうとて、はたはた駆けよつて杖にす

がり、投げ入れし一品を誰れにも笑つて告げざりしが好みの明烏さらりと語はせて、又御最負
その嬌音これたやすくは買ひがたし、彼れが子供の所業かと寄集りし人舌を巻いて太夫よりは
美登利の顔を眺めぬ、伊達には通るほどの藝人を此處にせき止めて、三味の音、笛の音、太鼓
の音うたはせて、舞はせて人の爲ぬ事して見たいと折ふし正太に叩いて聞かせれば、驚いて呆
れて已らは嫌やだな。

(九)

如是我聞、佛説阿彌陀經、聲は松風に和して心のちりも吹拂はるべき御寺様の庫裏より生魚わ
ぶる烟りなびきて、卵塔場に嬰子の襦袢ほしたるなど、お宗旨によりて掃ひなき事なれども、法
師を木のはしと心得たる目よりは、そらろに腥く覺ゆるぞかし、龍華寺の大和尚身代と共に
肥へ太りたる腹なり如何にも美事に、色つやの好きこと如何なる賞め言葉を参らせたらばよか
るべき、櫻色にもあらず、緋桃の花でもなし、剃りたてたる頭より顔より首筋にいたるまで、
銅色の照りに一點のにじりも無く、白髪もまじる太き眉をわけて心まかせの大笑ひなせる、
時は、本堂の如來さま驚きて臺座より轉ひ落給はんかと危ぶまる、やうなり、御新造はいまだ

四十の上の幾らも越さで、色白に髪毛薄く、丸髻も小さく結ひて見ぐるしからぬまでの人が
ら、参詣人へも愛想よく門前の花屋が口悪く兎角の蔭口を言はぬを見れば、着ふるしの浴
衣、總菜のお残りなどおのづからの御恩も蒙るなるべし、もとは檀家の一人成しが早くに良人
を失なひて寄る邊なき身の暫時こゝにお針やどひ同僚、口さへ濡らさせて下さらばとて洗ひ濯
ぎよりはじめてお菜ごしらへは素よりの事、墓場の掃除に男衆の手を助くるまで働けば、和尚
さま經濟より割出しでの御不憫かゝり、年は二十から違うて見ともなき事は女も心得ながら、
行き處なき身なれば結句よき死場所と人目を恥ぢぬやうに成りけり、にがくしき事なれども
女の心だて悪るからぬば檀家の者も左のみは咎めず、總領の花といふを懐胎し頃、檀家の中に
も世話好きの名ある坂本の油屋が隠居さま媒人といふも異な物なれど進みたて、表向きのもの
にしける、信如も此人の腹より生れて男女二人の同胞、一人は如法の髪屈ものにて一日部屋
中にまぢくと陰氣らしき生れなれど、姉のお花は皮薄の二重腮かわゆらしく出来たる子なれ
ば、美人といふにはあられども年頃といひ人の評判もよく、素人にして捨て置くは惜しい物
の中に加へぬ、さりとてお寺の娘に左り棲、お釋迦が三味ひく世は知らず人の聞え少しは憚か
られて、田町の通りに葉茶屋の店を奇麗にしつらへ、帳場格子のうち此娘を据へて愛敬を賣

らすれば、秤りの目は兎に角勘定しらずの若い者など、何がなしに寄つて大方毎夜十二時を聞
くまで店に客のかけ絶えたる事なし、いそがしきは大和尚、貸金の取たて、店への見廻り、法用の
あれこれ、月の幾日は説教日の定めもあり帳面くるやら経よむやら斯くては身體のつゞき難し
ど夕暮れの椽先に花むしろを敷かせ、片肌ぬぎに團扇つかひしながら大盃に泡盛をなみく
ど注がせて、さかなは好物の浦焼を表町のむさし屋へあらい處をどの誂へ、承りてゆく使ひ
番は真如の役なるに、其嫌やなること骨にしみて、路を歩くにも上を見し事なく、前向ふの筆
やに子供づれの聲を聞けば我が事を誂しらるゝかど情なく、そしらぬ顔に鯛屋の門を過ぎては
四邊に人目の隙をうかひひ、立戻つて駈け入る時の心地、我身限つて腥きものは食べまじと
思ひぬ。

父親和尚は何處までもさばけたる人にて、少しは欲深の名にたてども人の風説に耳をかたづけ
るやうな小膽にては無く、手の暇あらば熊手の内職もして見やうといふ氣風なれば、霜月の酉
には論なく門前の明地に管の店を開き、御新造に手拭ひかぶらせて縁喜の宜いのをと呼ばせる
趣向、はじめは恥かしき事に思ひけれど、軒ならび素人の手業にて莫大の儲けを聞くに、此雜
沓の中といひ離れも思ひ寄らぬ事なれば日暮れよりは目にも立つまじと思案して、晝間は花屋

の女房に手傳はせ、夜に入りては自身をり立て呼たつるに、欲なれやいつしか恥かしさも失せ
て、思はず屋だかに負ましょ負ましょと耻を追ふやうに成りぬ、人波にのまれて買人も眼の眩
みし折なれば、現在後世ねがひに一昨日來たりし門前も忘れて、管三本七十五錢と懸直すれ
ば、五本ついたを三錢ならばと直切つて行く、世はぬば玉の間の儲はこのほかに有るべし、
信如は斯かる事ともいかに心ぐるしく、よし檀家の耳には入らずとも近隣の人々が思はく、
子供仲間の噂にも龍華寺では管の店を出して、信さんが母さんの狂氣顔して賣つて居たなど、
言はれもするやと恥かしく、其様な事は止しにしたが宜う御座りませうと止めし事も有りしが、
大和尚大笑ひに笑ひすて、黙つて居る、黙つて居る、貴様などが知らぬ事だわとて丸々相手
にしては呉れず、朝念佛に夕勘定、そろばん手にしてこくと遊ばさるゝ顔つきは我親なが
ら淺ましくして、何故その頭を丸め給ひしぞと恨めしくも成りぬ。

元來一腹一對の中に育ちて他人交ぜずの穩かなる家の内なれば、さして此兒を陰氣ものに仕立
あげる種は無けれども、性來をとなしき上に我が言ふ事の用ひられれば兎角に物のおもしろか
らず、父が仕業も母の所作も姉の教育も、悉皆あやまりのやうに思はるれと言ふて聞かれぬ物
ぞと諦めればうら悲しき襟に情なく、友朋輩は變屈者の意地あると目させども自ら沈み居る心

の底の弱き事、我が蔭口を露ばかりもいふ者ありと聞けば、立出で、喧嘩口論の勇氣もなく、部屋にどち籠つて人に面の合はされぬ臆病至極の身なりけるを、學校にての出来ぶりといひ身分からの卑しからぬにつけても然る弱虫とは知る物なく、龍華寺の藤本は生煮えの餅のやうに眞があつて氣に成る奴と憎くがるものも有りけらし。

(十)

祭りの夜は田町の姉のもとへ使ひを吩咐られて、更るまで我家へ歸らざりければ、筆やの騒ぎは夢にも知らず、明日に成りて丑松文次その外の口よりこれ〜で有つたと傳へらるゝに、今更ながら長吉の亂暴に驚けども濟みたる事なれば咎めだてするも詮なく、我が名を借りられしばかりつく〜迷惑に思はれて、我が爲したる事ならぬと人々への氣の毒を身一つに背負たる様と思ひありき、長吉も少しは我が遣りそこねを恥かしう思ふかして、信如に逢はゞ小言や聞かんと其三四日は姿も見せず、やゝ餘炭のさめたる頃に信さんお前は腹を立つか知らないけれど時の拍子だから堪忍して置いて呉んな、誰れもお前正太が明葉とは知るまいでは無いか、何も女郎の一疋位相手にして三五郎を擲りたい事も無かつたけれど、萬燈を振込んで見りやあ唯

も歸れない、ほんの附景氣に詰らない事をしてのけた、夫りやあ己れが何處までも悪いさ、お前の命令を聞かなかつたは悪からうけれど、今怒られては法なした、お前といふ後だてが有るので己らお大舟に乗つたやうだに、見すてられちまつては困るだらうぢや無いか、嫌やだどつても此組の大將で居てくね〜、左様どち計は組まないからとて面目なさうに謝罪されて見れば夫れでも私は嫌やだとも言ひがたく、仕方が無い遣る處までやるさ、弱い者いぢめは此方の恥になるから三五郎や美登利を相手にしても仕方が無い、正太に未社がついたら其時のこと、決して此方から手出しをしてはならないと留めて、さのみは長吉をも叱り飛ばさねと再び喧嘩のなきやうに祈られぬ。

罪のない子は横町の三五郎なり、思ふさまに擲かれて蹴られて其二三日は立居も苦しく、夕ぐれ毎に父親が空車を五十軒の茶屋が軒まで運ぶにさ〜、三公は何うかしたか、ひどく弱つて居るやうだなど見知りの藝屋に咎められしほど成しが、父親はも辭氣の鋭とて目上の人に頭をあげた事なく廊内の旦那は言はずとももの事、大屋様地主様いづれの御無理も御尤と受ける質なれば、長吉と喧嘩してこれこれの亂暴に逢ひましたと訴へればとて、それは何うも仕方が無い大屋さんの息子さんでは無いか、此方に理が有らうが先方が悪からうが喧嘩の相手に成るとい

ふ事は無い、謝罪て来い謝罪て来い途方も無い奴だと我子を叱りつけて、長吉がもとへあやまりに遣られる事必定なれば、三五郎は口惜しさを噛みつぶして七日十日と程をふれば、痛みの場所の癒ると共に其うらめしさも何時しか忘れて、頭の家赤ん坊が守りをして二錢が駄賃をうれしが、ねん／＼よ、あころりよ、と背負ひあるくさま。年はと問へば生意氣さかりの十六にも成りながら其大躰を取かしげにもなく、表町へものこ／＼と出かけるに、何時も美登利と正太が黝りものに成つて、お前は性根を何處へ置いて来たぞからかはれながらも遊びの仲間には外れざりき。

春は櫻の賑ひよりかけて、なき玉菊が燈籠の頃、ついで秋の新仁和賀には十分間に車の飛ぶ事此通りのみにて七十五輛と数へしも、二の替りさへいつしか過ぎて、赤崎蛤田圃に亂るれば横堀に鶴なく頃も近づきぬ、朝夕は秋風身にしみ渡りて上清が店の蚊遣香懐燻灰に座をゆづり、石橋の田村やが粉挽く臼の音さびしく、角海老が時計の響きもそらる哀れの音を傳へるやうに成れば、四季絶間なき日暮里の火の光りも彼れが人を焼く煙りかどたら悲しく、茶屋が裏ゆく士手下の細道に落ちるやうな三味の音を仰いで聞けば、仲之町藝者が研えたる腕に、君が情の假寐の床に何ならぬ一ふし哀れも深く、此時節より通ひ初るは浮かれ浮かる、遊客ならで、

身にしみ／＼と實のある方よし、遊女あがりの去る女が申き、此ほどの事か／＼もくたくだしや大音寺前にて珍らしき事は盲目按摩の二十ばかりなる娘、かなはぬ戀に不自由なる身を恨みて水の谷の池に入水したるを新らしい事として傳へる位なもの、八百屋の吉五郎に大工の太吉がさつぱりと影を見せぬが何とかせしと問ふに此一件であげられましたと、顔の真中へ指をさして、何の仔細なく取立て、囁をする者もなし、大路を見渡せば罪なき子供の子供の三五人手を引つれて開いらいた開いらいた何の花ひらいたと、無心の遊びも自然と静かに、廊に通ふ車の音のみ何時に變らず勇ましく聞えぬ。

秋雨しと／＼と降るかと思へばさつと音して運びくる様なる淋しき夜、通りすがりの客をば待たぬ店なれば、筆やの妻は宵のほどより表の戸をたて、中に集まりしは例の美登利に正太郎、その外には小さき子供の子供の二三人寄りて細嚙はじきの幼なげな事して遊ぶほどに、美登利と耳を立て、あれ誰れか買物に来たのでは無いか襪板を踏む足音がするといへば、ちや左様か、己いらは小つとも聞なかつたぞ正太もちう／＼たこかいの手を止めて、誰れか仲間が来たのでは無いかと嬉しがるに、門なる人は此店の前まで来たりける足音の聞えしかばかり夫れよりはふつと絶えて音も沙汰もなし。

正太は潜りを明けてばあと言ひながら顔を出すに、人は二三軒先の軒下をたどりて、ぼつくと行く後影、誰れだ誰れだ、あゝお遣入よと聲をかけて、美登利が足駄を突かけばきに、降る雨を厭はず馳け出さんとせしが、あゝ彼奴だと一ト言、振かへつて、美登利さん呼んだつても來はしないよ、一件だもの、と自分の頭を丸めて見せぬ。

信さんかへ、と受けて、嫌やな坊主つたら無い、屹度筆か何か買ひに來たのだけれど、私たちが居るものだから立聞きをして歸つたのであらう、意地悪の、根性まがりの、ひねつこびれの、屹りの、齒かけの、嫌やな奴め、遣入つて來たら散々と窘めてやる物を、歸つたは惜しい事をした、とれ下駄をお貸し、一寸見てやる、とて正太に代つて顔を出せば軒の雨だれ前髪に落ちて、あゝ氣味が悪いと首を縮めながら、四五軒先の瓦斯燈の下を大黒傘肩にして少しうつむいて居るらしくとぼくと歩む信如の後かげ、何時までも、何時までも、何時までも、見送るに、美登利さん何うしたの、と正太は怪しがりて背中をつつきぬ。

何うもしない、と氣の無い返事をして、上へあがつて細螺を敷へながら、本當に嫌やな小僧と

つては無い、表向きは威張つた喧嘩は出來もしないで、温順しさうな顔ばかりして、根性がぐずぐずして居るのだもの憎くらしからうでは無いか、家の母さんが言ふて居たつて、瓦落くして居る者は心が好いのだと、夫だからぐずぐずして居る信さん何かは心が悪いに相違ない、ぬへ正太さん左様であらう、と口を極めて信如の事を悪く言へば、夫れでも龍華寺はまだ物が解つて居るよ、長吉と來たら彼れははやと、生氣意に大人の口を真似れば、お慶しよ正太さん、子供の癖にませた様でをかしい、お前は餘つばど馴れものだね、とて美登利は正太の頬をついて、其真面目がほほと笑ひこけるに、己らだつても最少し經ては大人になるのだ、蒲田屋の旦那のやうに角袖外套か何か着てね、祖母さんが仕舞つて置く金時計を貰つて、そして指輪もこしらへて、巻煙草を吸つて、履く物は何が宜かろうか、己らは下駄より雪駄が好きだから、三枚裏にして纏珍の鼻緒と云ふのを履くよ、似合ふだらうかと言へば、美登利はぐずぐず笑ひながら、背の低い人が角袖外套に雪駄ばき、まあ何んなにか可笑しからう、目薬の瓶が歩くようであらうと誹すに、馬鹿を言つて居らあ、それまでには己らだつて大きく成るさ、此様な小つばけでは居ないと威張るに、夫れではまだ何時の事だか知れはしない、天井の鼠があれ御覽、と指をさすに、筆やの女房を始めとして座にある者みな笑ひこころげぬ。

正太は一人眞面目に成りて、例の目の玉ぐるぐるとさせながら美登利さんは冗談にして居るのだね、誰れつてお大人に成らぬ者は無いに、己らの言ふが何故あかしからう、奇麗な嫁さんを買つて連れて歩くやうに成るのだからなあ、己らは何でも奇麗のが好きだから、煎餅やお福のやうな痘痕づらや、薪やのお出願のやうなのが萬一來ようなら、直さま退出して家へは入れて遣らないや、己らは痘痕と濕つかきは大嫌ひと力を入れるに、主人の女は吹出して、夫れでも正さん宜く私が店へ来て下さるの、伯母さんの痘痕は見えぬかえと笑ふに、夫れでもお前は年寄りだもの、己らの言ふのは嫁さんの事さ、年寄りは何でも宜いとあるに、夫れは大失敗だねと筆やの女房おもしろづくに御機嫌を取りぬ。

町内で顔の好いのは花屋のち六さんに、水菓子やの喜いさん、夫れよりも夫れよりもずんと好いのはお前の隣に据つてお出なさるなれど、正太さんはまあ誰にしようと思つてあるえ、お六さんの眼つきか、喜いさんの清元か、まあ何れをえ、と問はれて、正太顔を赤くして、何だお六づらや、喜い公、何處が好い者かど釣りらんぶの下を少し居退きて、壁際の方へと尻込みをすれば、それでは美登利さんが好いのであらう、さう極めて御座んすの、と圖星をさゝられて、そんな事を知る物か、何だ其様な事、とくるり後を向いて壁の腰ばりを指でたゝきながら、廻

れく水車を小音に唄ひ出す、美登利は衆人の細螺を集めて、さあ最う一度はじめからと、これに顔をも赤らめたりき。

(十一)

信如が何時も田町へ通ふ時、通らでも事の濟めども言はれ近道の土手々前に、假初の格子門のぞけば鞍馬の石燈籠に萩の袖垣まをらしう見えて、縁先に巻きたる籠のさまもなつかしう、中がらすの障子のうちには今様の按察の後室が珠敷をつまぐつて、冠つ切りの若紫も立出るやと思はるゝ、その一ツ構へが大黒屋の寮なり。昨日も今日も時雨の空に、田町の姉より頼みの長胴着が出来たれば、暫時も早う重ねさせたき親心、御苦勞でも學校まへの一寸の間に持つて行つて呉れまいか、定めて花も待つて居ようほどに、母親よりの言ひつけを、何も嫌やどは言ひ切られぬ温順しさに、唯はいくど小包みを抱へて、鼠小倉の緒のすがりし朴木齒の下駄ひたくと、信如は雨傘さしかざして出ぬ。

お齒ぐろ溜の角より曲りて、いつも行くなる細道をたどれば、運わるう大黒やの前まで来し時、さつと吹く風大黒傘の上を掴みて、宙へ引あげるかと疑ふばかり烈しく吹けば、これは成らぬ

と力足を踏こたゆる途端、そのみに思はざりし前鼻緒のする／＼と抜けて、傘よりもこれこそ一の大事に成りぬ。

信如こまりて舌打はすれども、今更何と法のなければ、大黒屋の門に傘を寄せかけ、降る雨を庇に厭ふて鼻緒をつくろふに、常々仕馴れぬ坊さまの、これは如何な事、心ばかりは急れども、何としても甘くはすげる事の成らぬ口惜しさ、ぢれて、ぢれて、袂の中から記事文の下書きして置いた大半紙を掴み出し、ずん／＼と裂きて紙縷をよるに、意地わるの嵐まともや落し来て、立かけし傘のころころと轉り出るを、いま／＼しい奴めと腹立たしげにいひて、取止めんと手を延ばすに、膝へ乗せて置きし小包み意久地もなく落ちて、風呂敷は泥に、我着る物の袂までを汚しぬ。

見るに氣の毒なるは雨の中の傘なし、途中に鼻緒を踏み切りたるばかりは無し、美登利は障子の中ながら硝子ごしに遠く眺めて、あれ誰れか鼻緒を切つた人がある、母さん切れを遣つても宜う御座んすかと尋ねて、針箱の引出しから友仙ちりめんの切れ端をつかみ出し、庭下駄はくも鈍かしきやうに、馳せ出で、線先の洋傘さすより早く、庭石の上を傳ふて急ぎ足に來りぬ。それと見るより美登利の顔は赤う成りて、何のやうの大事にでも逢ひしやうに、胸の動悸の早

くうつを人の見るかと背後の見られて、恐る／＼門の傍へ寄れば、信如もふつと振り返りて、此れも無言の脇を流るゝ冷汗、既足に成りて逃げ出したき思ひなり。

平常の美登利ならば信如が難義の體を指さして、あれ／＼彼の意久地なしと笑ふて笑ふて笑ひ抜いて、言ひたいまゝの悪まれ口、よくも祭りの夜は正太さんに仇をするとして私たちが遊びの邪魔をさせ、罪も無い三ちゃんを擲かせて、お前は高見で采配を振つてお出なされたの、さあ謝罪なさんすか、何とで御座んす、私の事を女郎女郎と長吉づらに言はせるのもお前の指圖、女郎でも宜いでは無いか、座一本お前さんが世話には成らぬ、私には父さんもあり母さんもあり、大黒屋の旦那も姉さんもある、お前のやうな腥のお世話には能うならぬほどに餘計な女郎呼はり置いて貰ひましたよ、言ふ事があらば陰のくす／＼ならで此處で言ひなされ、お相手には何時でも成つて見せます、さあ何とで御座んす、と袂を捉らへて捲しかくる勢ひ、そこそは當り難うもあるべきを、物いはず格子のかげに小隠れて、さりとて立去るでも無しに唯うち／＼と胸をうろかすは平常の美登利のさまにては無かりき。

此處は大黒屋の思ふ時より信如は物の恐ろしく、左右を見ずして直あゆみに爲しなれども、生憎の雨、あやにくの風、鼻緒をさへに踏切りて、詮なき門下に紙縷を纏る心地、憂き事さまざまに何うも堪へられぬ思ひの有した、飛石の足音は背より冷水をかけられるが如く、願みぬども其人と思ふに、わななくと慄へて顔の色も變るべく、後向きに成りて猶も鼻緒に心を盡すと見せながら、半は夢中に此下駄いつまで懸りても履ける様には成らんともせざりき。

庭なる美登利はさしのぞいて、さ、不器用な彼んな手つきして何うなる物ぞ、紙縷は姿々縷、乘しべなんぞ前蓋に抱かせたどて長もちのする事では無い、夫れく羽織の裾が地について泥に成るは御存じ無いか、あれ傘が轉がる、あれを疊んで立てかけて置けば好いにど一々鈍かしう齒がゆくは思へども、此處に裂れが御座んす、此裂であすげなされと呼かくる事もせず、これも立盡して降雨袖に詫しきを、厭ひもあへず小隠れて覗ひしが、さりととも知らぬ母の親はるかに聲を懸けて、火のしの火が熾りましたぞえ、此美登利さんは何を遊んで居る、雨の降るに表へ出での悪戯は成りませぬ、又此間のやうに風引かうぞと呼立てられるに、はい今行ますと大きく言ひて、其聲信如に聞えしを耻かしく、胸はわくわくと上氣して、何うでも明けられぬ門の際にさりととも見過しがたき難義をさまざまの愚案盡して、格子の間より手に持つ裂れを物

いはず投げ出せば、見ぬやうに見て知らず顔を信如のつくるに、さ、例の通りの心根を遷る瀬なき思ひを眼に集めて、少し涙の恨み顔、何を憎んで其やうに無情そぶりは見せらるゝ、言ひたい事は此方にあるを、餘りな人とこみ上るほど思ひに迫れど、母親の呼聲しばくなるを詫しく、詮方なさに一ト足ニタ足え、何ぞいの未練くさい、思はく耻かしく身をかへして、かた／＼と飛石を傳ひゆくに、信如は今ぞ淋しう見かへれば紅入り友仙の雨にぬれて紅葉の形のうるはしきが我が足ちかく散ばひたる、そらろに床しき思ひは有れども、手に取あぐる事もせず空しう眺めて憂き思ひあり。

我が不器用をあきらめて、羽織の紐の長きをはづし、結びつけにくく／＼と見とむなき間に合せをして、これならばと踏試るに、歩きにくき事言ふばかりなく、此下駄で田町まで行く事かと今さら難義は思へども詮方なくて立上る信如、小包みを横にニタ足ばかり此門をはなれるに友仙の紅葉目に残りて、捨て過ぐるにしのび難く心残りして見返れば、信さん何うした鼻緒を切つたのか、其姿は何だ、見ッとも無いなど不意に聲を懸くる者のあり。

驚いて見かへるに暴れ者の長吉、いま廓内よりの歸りと覺しく浴衣を重ねし唐櫛の着物に柿色の三尺を例の通り腰の先にして、黒八の襟のかゝつた新しい半天、印の傘をさしかざし高足

駄の爪皮も今朝よりとはしるき漆の色、きはくしう見えて誇らし氣なり。
僕は鼻緒を切つて仕舞つて何う爲ようかと思つて居る、本當に弱つて居るのだ、と信如の意久
地なき事を言へば、左様だらうお前に鼻緒の立ッとは無い、好いや己れの下駄を履て行ぬへ、
此鼻緒は大丈夫だよといふに、夫れでもお前が困るだらう。何己れは馴れた物だ、斯うやつて
斯うすると言ひながら急遽しう七分三分に尻端折て、其様な結びつけなんぞより是れが爽快だ
と下駄を脱ぐに、お前既足に成るのか夫れでは氣の毒だと信如困り切るに、好いよ、己れは馴
れた事だ信さんなんぞは足の裏が柔らかいから既足で石ころ道は歩けない、さあ此れを履いて
お出で、と揃へて出す親切さ、人には疫病神のやうに厭はれながらも毛虫眉毛を動かして優し
き詞のもれ出るぞをかしき、信さんの下駄は己れが提げて行かう、蓋處へ抛り込んで置たら仔
細はあるまい、さあ履き替へて夫れをお出しと世話をやき、鼻緒の切れしを片手に提げて、そ
れなら信さん行てお出、後刻に學校で逢はうぜの約束、信如は田町の姉のもとへ、長吉は我家
の方へと行別れるに思ひの止まる紅入の友仙は可憐しき姿を空しく格子門の外にと止めぬ。

(十四)

此年三の酉まで有りて中一日はつぶれしかど前後の上天氣に大鳥神社の賑ひすさまじく、此處
かこつけに検査場の門より亂れ入る若人達の勢ひとては、天柱だけ地維かくるかと思はるゝ
笑ひ聲のとよめき、仲之町の通りは俄に方角の替りしやうに思はれて、角町京町處々のは
ね橋より、さつと押せくと猪牙が、つた言葉に人波を分くる群もあり、河岸の小店の百嘴づ
りより、優にうづ高き大籠の樓上まで、終歌の聲のさまじくに沸き来るやうな面白さは大方の
人おもひ出で、忘れぬ物に思すも有るべし、正太は此日日がけの集めを休ませ賞ひて、三五郎
が大頭の店を見舞ふやら、團子屋の背高が愛想氣のない汁粉やを音づれて、何うだ儲けがある
かえと言へば、正さんお前好い處へ来た、我れが餡この種なしに成つて最う今からは何を賣ら
う、直様煮かけては置いたれど、中途お客は断れない、何うしような、と相談を懸けられて、
智恵無しの奴め大鍋の四邊に夫れッ位無駄がついて居るでは無いか、夫れへ湯を廻して砂糖さ
へ甘くすれば十人前や二十人は浮いて来よう、何處でも皆な左様するのだお前の店ばかりでは
ない、何此騒ぎの中で好悪を言ふ者が有らうか、お賣りも賣りと言ひながら先に立つて砂糖の
壺を引寄すれば、目ツかちの母親もどろいた顔をして、お前さんは本當に商人に出来て居なさ
る、恐ろしい智恵者だと賞めるに、何だ此様な事が智恵者な物か、今横町の潮吹きで處で餡が

足りないッて此様やつたを見て来たので己れの發明では無い、と言ひ捨て、お前は知らないか美登利さんの居る處を、己れは今朝から探して居るけれど何處へ行たか筆やへも来ないと言ふ、廊内だらうかなと問へば、む、美登利さんは今今の先己れの家の前を通つて揚屋町の廻橋から追入つて行た、本當に正さん大變だぜ、今日はね、髪を斯ういふ風にこんな島田に結つて、變てこな手つきをして、奇麗だね彼の娘はと鼻を拭つ、言へば、大卷さんより猶美いや、だけれど彼の子も華魁に成るのでは可憐さうだと下を向ひて正太の答ふるに、好いじやあ無いか華魁になれば、己れは來年から際物屋に成つてお金をこしらへるがね、夫れを持つて買ひに行くのだと頓馬を現はすに、洒落くさい事を言つて居らぬ左うすればお前はきつと振られるよ。何故々々何故でも振られる理由があるのだもの、と顔を少し染めて笑ひながら、夫れじやあ己れも一廻りして來ようや、又後に來るよと捨て置辭して門に出で、十六七の頃までは喋り花よと育てられ、と怪しきふるへ聲に此頃此處の流行ぶしを言つて、今では勤めが身にしてみても口の内にくり返し、例の雪駄の音たかく浮きたつ人の中に交りて小さき身軀は忽ちに隠れつ。揉まれて出し廊の角、向ふより番頭新造のお妻と連れ立ちて話しながら來るを見れば、まがひも無き大黒屋の美登利なれども誠に頓馬の言ひつる如く、初々しき大島田結ひ綿のやうに絞り

ばなしふさ〜とかけて、籠甲のさし込、穂つきの花かんざしひらりかし、何時よりは極彩色のたゞ京人形を見るやうに思はれて、正太はあつとも言はず立止まりしま、例の如くは抱きもせで打守るに、彼方は正太さんかどて走り寄り、お妻さんお前買ひ物が有らば最う此處でも別れにしましよ、私は此人と一處に歸ります、左様ならどて頭を下げるに、あれ美いちやんの現金な、最うお送りは入りませぬとかえ、そんなら私は京町で買物しましよ、とちよこ〜走りに長屋の細道へ駆け込むに、正太はじめて美登利の袖を引いて好く似合ふね、いつ結つたの今朝か〜昨日か〜何故はやく見せては呉れなかつた、と恨めしげに甘ゆれば、美登利打しはれて口重く、姉さんの部屋で今朝結つて貰つたの、私は厭やでしょうが無い、とさし俯向きて往來を耻ぢぬ、

(十五)

憂く恥かしく、つゝまじき事身にあれば人の褒めるは嘲りと聞なされて、島田の齡のなつかしさに振かへり見る人たをば我れを蔑む眼つきと察られて、正太さん私は自宅へ歸るよと言ふに、何故今日は遊ばないのだらう、お前何か小言を言はれたのか、大卷さんと喧嘩でもしたの

では無いか、と子供らしい事を問はれて答へは何と顔の赤むばかり、連れ立ちて團子屋の前を過ぎるに頼馬は店より聲をかけてお間が宜しう御座いますと仰山の言葉を聞くより美登利は泣きたいやうな顔つきして、正太さん一處に來ては嫌やだよと、置きざりに一人足を早めぬ。お酉さまへ諸共にと言ひしを道引違へて我が家の方へと美登利の急ぐに、お前一處には來て呉れないのか、何故其方へ歸つて仕舞ふ、餘りだせと例の如く甘へてかゝるを振切るやうに物言はず行けば、何の故とも知らねども正太は呆れて追ひすがり袖を止めては怪しがるに、美登利顔のみ打赤めて、何でも無い、と言ふ聲理由あり。

寮の門をばく入り入るに正太かねても遊びに來馴れて左のみ遠慮の家にもあらねば、跡より續いて襟先からそつと上るを、母親見るより、お正太さん宜く來て下さつた、今朝から美登利の機嫌が悪くて昔なわぐねて困つて居ます、遊んでやつて下されと言ふに、正太は大人らしい惶りて加減が悪るいのですかと眞面目に問ふを、いゝえ、と母親怪しき笑顔をして少し経てば癒りませう、いつでも極りの我まゝ様、無お友達とも喧嘩しませうな、眞實やり切れぬ娘さまではあるとて見かへるに、美登利はいつか小座敷に蒲團抱卷持出で、帯と上着を脱ぎ捨てしばかり、うつ伏し臥して物をも言はず。

正太は恐る／＼枕もとへ寄つて、美登利さん何うしたの病氣なのか心持が悪いのか全體何うしたの、と左のみは摺寄らず膝に手を置いて心ばかりを悩ますに、美登利は更に答へも無く押ゆる袖にしのび音の涙、まだ結ひこめぬ前髪の毛の濡れて見ゆるを仔細ありとはしるけれど、子供心に正太は何と慰めの言葉も出ず唯ひたすらに困り入るばかり、全體何が何うしたのだから、己れはお前に怒られる事はしもしないに、何が其様なに腹が立つの、と覗き込んで途方にくるれば、美登利は眼を拭きて正太さん私は怒つて居るのでは有りません。

夫れなら何うしてと問はれれば愛き事さまたま是れは何うでも話しのほかの包まじさなれば、離れに打明けいふ筋ならず、物言はずして自づと頬の赤うなり、さして何ととは言はれねども次第々々に心細き思ひ、すべて昨日の美登利の身に覺えなかりし思ひをまうけて物の恥かしさ言ふばかり無く、成る事ならば薄暗き部屋のうち離れとて言葉をかけもせず我が顔ながむる者なしに一人氣まゝの朝夕を経たや、さらば此様の愛き事ありとも人目つゝまじからずは斯く迄物は思ふまじ、何時迄も何時までも人形と紙雜好とを相手にして飯事許りして居たらば無かし嬉しき事ならんぞ、を、服や／＼、大人に成るは厭やな事、何故此やうに年をば取る、最う七月十月、一年も以前へ歸りたいにと老人じみた考へをして、正太の此處にゐるをも思はれず、物の

ひかければ、悉く蹴ちらして、歸つてお呉れ正太さん、後生だから歸つてお呉れ、お前が居ると私は死んで仕舞ふであらう、物を言はれると頭痛がする、口を利くと目がまわる、離れも私わたしの處へ来ては厭いややなれば、お前も何卒歸つてと例に似合ぬ愛想つかし、正太は何故とも得ぞ解きがたく、畑のうちにあるやうにてお前は何うしても變てこたよ、其様な事を言ふ等は無へに、可怪しい人だね、と是れはいさゝか口惜しき思ひに、落ついで言ひながら目には氣弱の涙のうかぶを、何とて夫れに心を置くべき歸つてお呉れ、歸つてお呉れ、何時まで此處に居て呉れ、ば最うお友達でも何でも無い、厭やな正太さんだと憎くらしげに言はれて、夫れならは歸るよ、お邪魔さまで御座いましたとて、風呂場に加減見る母親には挨拶もせず、ふいと立つて正太は庭先よりかけ出しぬ。

(十六)

眞一文字に驅けて人中を抜けつ潜りつ、筆屋の店へをどり込めば、三五郎は何時か店をば賣仕舞ふて、腹掛のかくしへ若干金かをちやらつかせ、弟妹引つれつ、好きな物をば何でも買への大兄様、大愉快の最中へ正太の飛込み來しなるに、やあ正さん今お前をば探して居たのだ、

己れは今日は大分の儲けがある、何か奢つて上やうかと言へば、馬鹿をいへ手前に奢つて貰ふ己れでは無いわ、黙つて居る生意氣は吐くなど何時になく荒らし事を言つて、夫れどころでは無いとて鬱々に、何だ何だ喧嘩かと飯べかけの飯ばんを懷中に捻ぢ込んで、相手は離れた、龍華寺か、長吉か、何處で始まつた廓内は鳥居前か、お祭りの時とは違ふぜ、不意でさへ無くは負けはしない、己れが承知だ先棒は振らぬ、正さん勝手玉をしつかりして懸りぬへ、と競へかかるに、えゝ氣の早い奴め、喧嘩では無いとて、洗石に言ひかねて口を噤めば、でもお前が最層らしく飛込んだから己れは一途に喧嘩かと思つた、だけれど正さん今夜はじまらなければ最う是れから喧嘩の起りつこは無いね、長吉の野郎片腕がなくなる物と言ふに、何故どうして片腕がなくなるのだ。お前知らずか己れも唯今うちの父さんが龍華寺の御新造と話して居たを聞いたのだが、信さんは最う近々何處かの坊さん學校へ遣入るのだとさ、衣を着て仕舞へば手が出ぬへや、唐つきり彼んな袖のべら／＼した、恐ろしい長い物を捲り上げるのだからね、左うなれば來年から横町も表も残らずお前の手下だよと煽すに、廢して呉れ二錢貰ふと長吉の組に成るだらう、お前みたやうのが百人仲間有たとて少とも嬉しい事は無い、着きたへ方へ何方へでも着きぬへ、己れは人は頼まない眞の腕ツこで一度龍華寺とやりたかつたに、他處へ行かれ

ては仕方が無い、藤本は來年學校を卒業してから行くのだと聞いたが、何うして其様に早く成つたらう、爲様のない野郎だと舌打しながら、夫れは少しも心に止まらねども美登利が素振のくり返されて正太は例の歌も出ず、大路の往來の夥たゞしきさへ心淋しければ賑やかなりとも思はれず、火どもし頃より筆やが店に轉がりて、今日の酉の市目茶々々此處も彼處も怪しき事成りき。

美登利はかの日を始めて生れかはりし様の身の振舞、用ある折は廓の姉のもとにこそ通へ、かけても町に遊ぶ事をせず、友達さびしがりて誘ひに行けば今に今に空約束はてし無く、さしもに中よし成けれど正太とさへに親します、いつも耻かし氣に顔のみ赤めて筆やの店に手踊の活潑さは再び見るに難く成ける、人は怪しがりて病ひの故か危ぶむもあれども母親一人ほゝ笑みては、今にお供の本性は現れます、これは中休みと仔細ありげに言はれて、知らぬ者には何の事とも思はれず、女らしう温順しう成つたと褒めるもあれば折角の面白子を種なしにしたと誹るもあり、表町は俄に火の消えしやう淋しく成りて正太が美音も聞く事なれに、唯夜な〜の弓張提燈、あれは日がけの集めとしるく土手を行く影をさる寒げに、折ふし供する三五郎の聲のみ何時に變らず滑稽では聞えぬ。

龍華寺の信如が我が宗の修業の庭に立出る風説をも美登利は絶えて聞かざりき、有し意地をば其まゝに封じ込めて、此處しばらくの怪しの現象に我れを我れとも思はれず、唯何事も耻かしうのみ有けるに、或る霜の朝水仙の作り花を格子門の外よりさし入れ置きし者の有けり、誰れの仕業と知るよし無けれど、美登利は何ゆゑとなく懐かしき思ひにて違ひ棚の一輪さしに入れ、て淋しく清き姿をめでけるが、聞くともなしに傳へ聞く其明けの日は信如が何がしの學林に袖の色かへぬへき當日なりしとぞ。

一 葉 全 集 大 尾

明治三十年一月
明治三十年一月
日發行

定價金四拾錢

版權
所有

編輯者 大橋又太郎
發行者 大橋新太郎

印刷者 愛敬利世

印刷所 株式會社 秀英舍

京橋區四紺屋町廿六七番地
京橋區四紺屋町廿六七番地

發兌元

東京日本橋區
本町三丁目

博文館

故若松賤子女史譯述

小公子

全一册洋装大判 正價金五拾五錢 郵税八錢

賤子女史
肯像及
松井昇
密書入

故若松賤子女史が、邦文學を代表するものとして、世の公評ある「小公子」の全篇は今や之を世に公にするに至れり。特に其後篇は、久しく讀者社會の渴望せしものにして、今日始めて、世上に顯はるゝものなり

幸田露伴君新作

ひげ男

全一册洋装大判 正價金三拾錢 郵税六錢

宮岡永
洗密書
挿入

思想文章準備を以て、今の文章と許さるゝ露伴子の傑作、若想像に依て天外より落ち、筆々奇響雄拔、讀み來つて無限の趣味あり、御愛讀めらんことを請ふ。

小説の出版日に月に盛んに、我邦文運の隆昌、古來未だ嘗て今日の如きはあらず。本館偶々感ずる所あり、茲に袖珍小説を出版す。本是れ一世の名流巨匠の筆に成り、所謂金鑿にして玉振なるもの、其想は後述奇拔、其文は瑰麗雄大、實に文界の傑觀たるに背かず。表裝亦美術大家の新意匠に成りて、明感淨凡の下、紳士淑女の好侶伴たるべく、船に、車に、山に伴ひ、水に伴ひ、旅感に、珍るべく、又時に世相を觀し文章を習ふ徒をして、精讀沈思鑄て以て餘師あらしむ。江湖諸君請ふ隆慶愛讀を賜はらんことを

袖珍小説

每月發行三
本

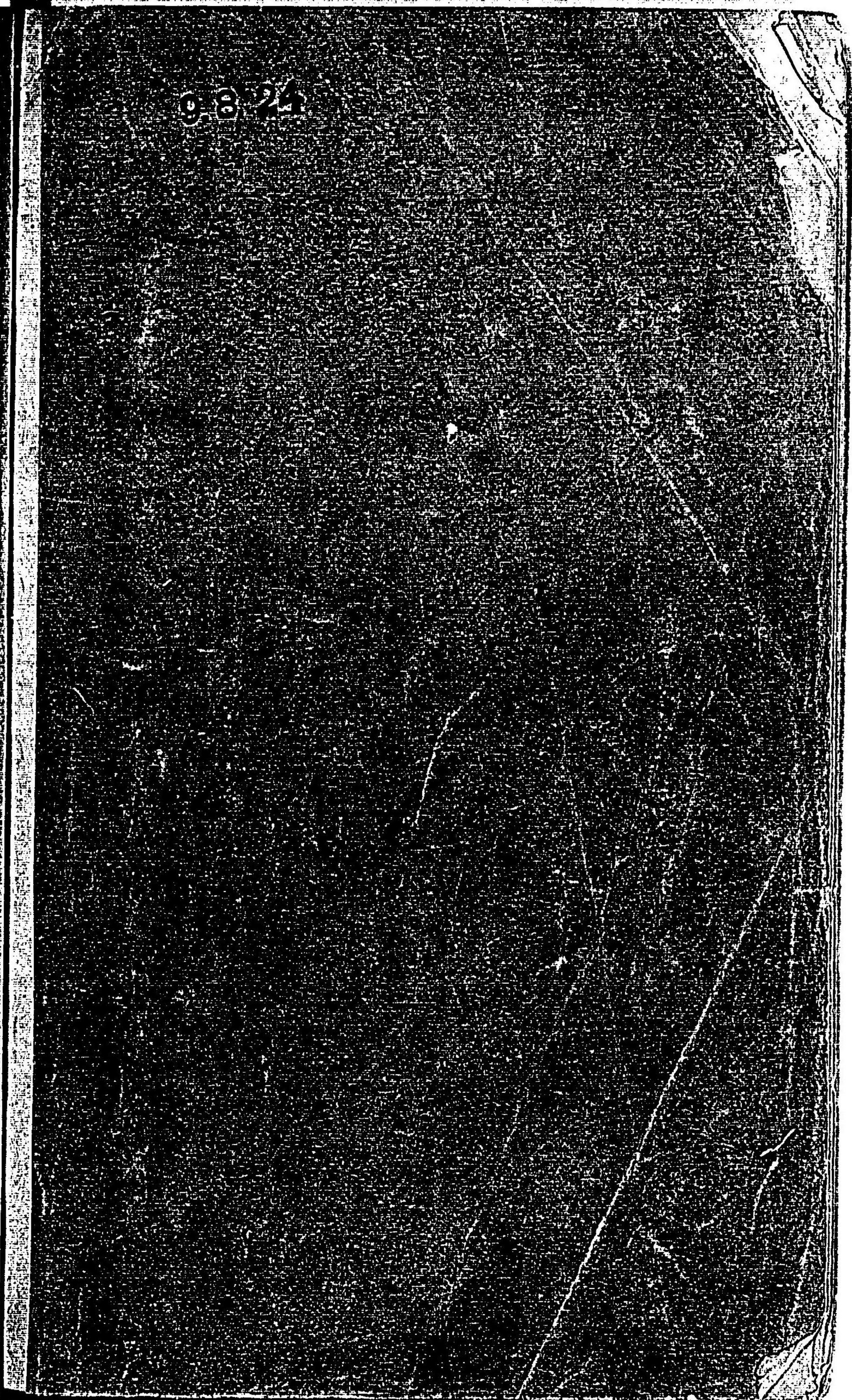
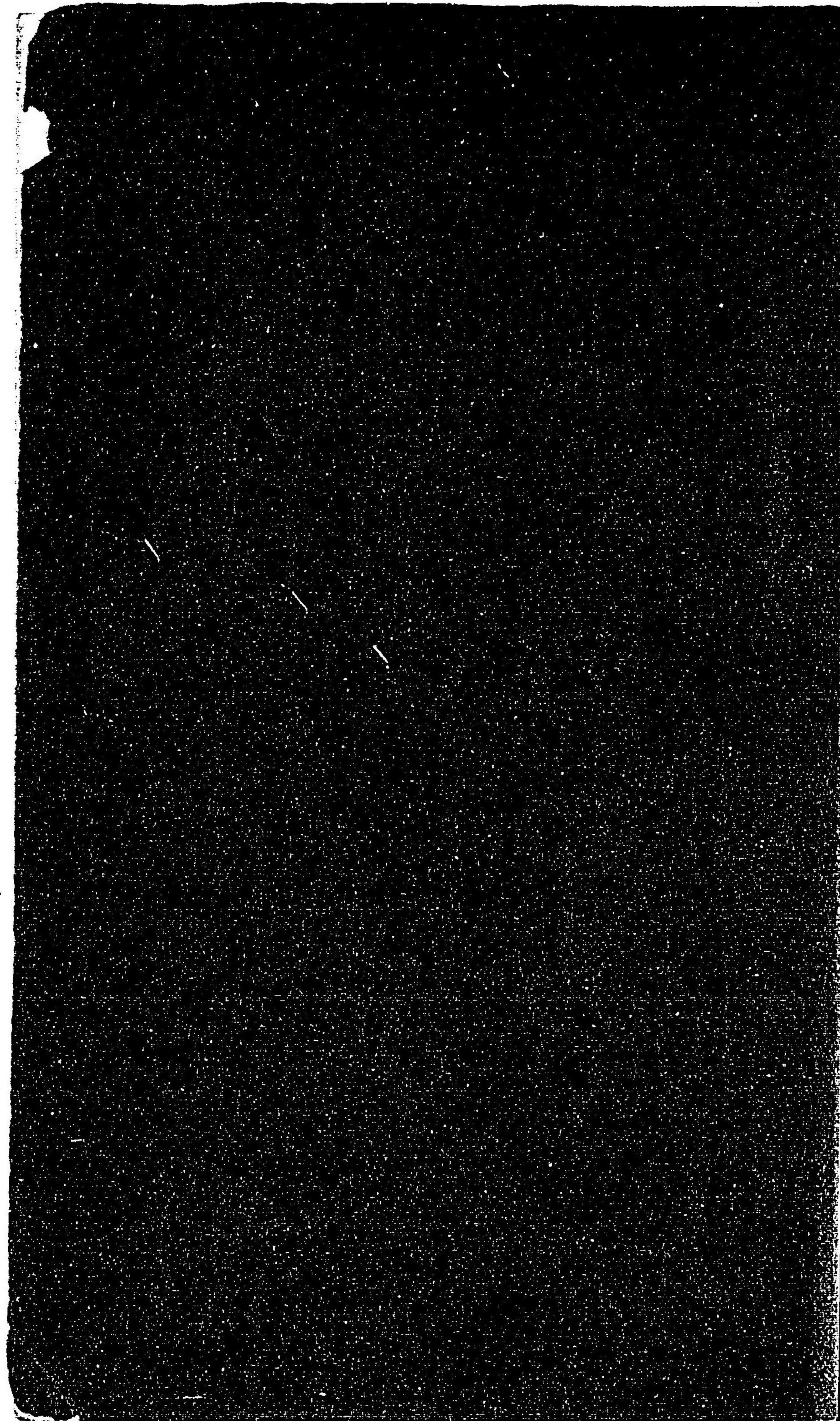
正價一册八錢 六册前金四十五錢
十二册前金八十錢 郵税一册四錢

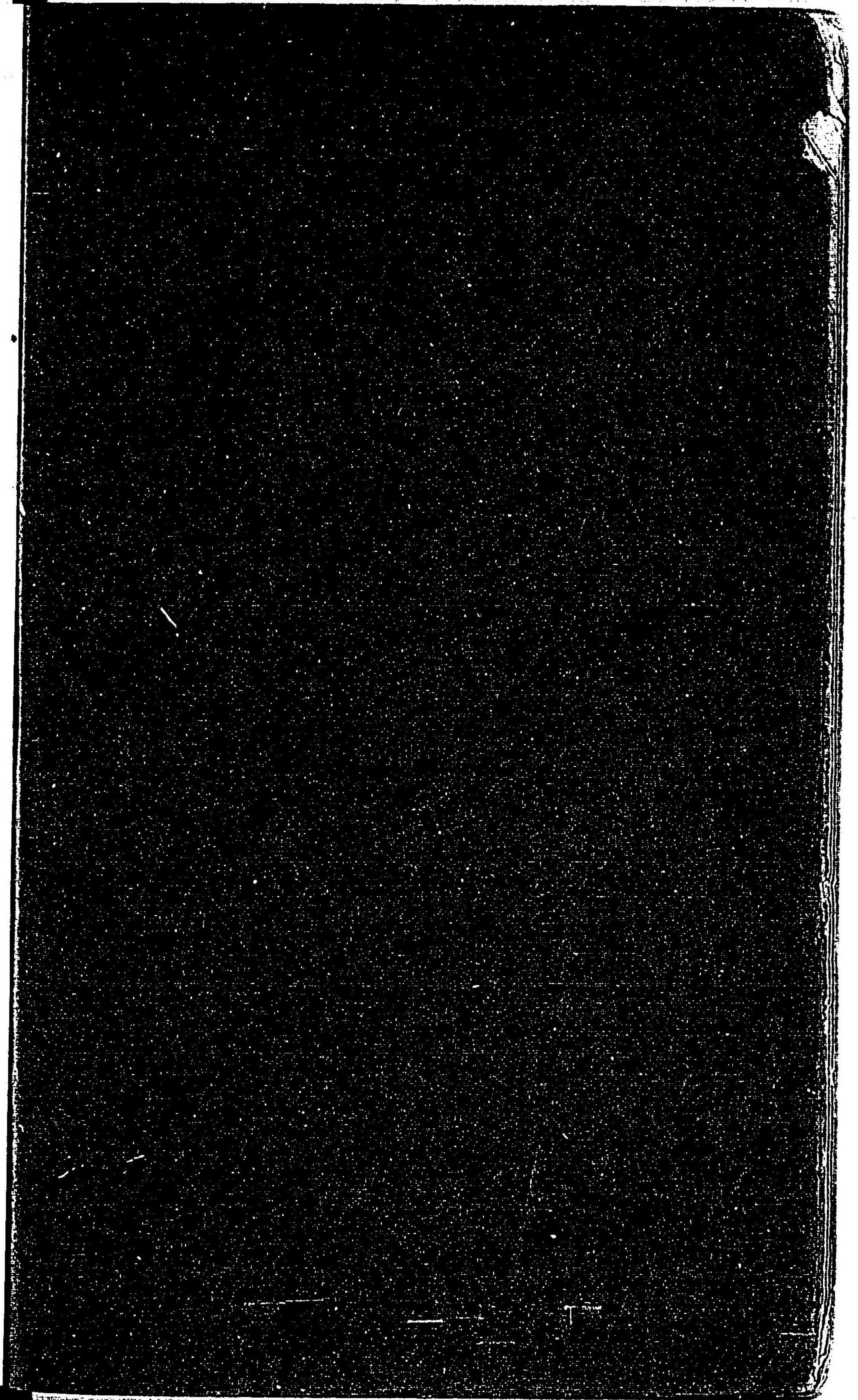
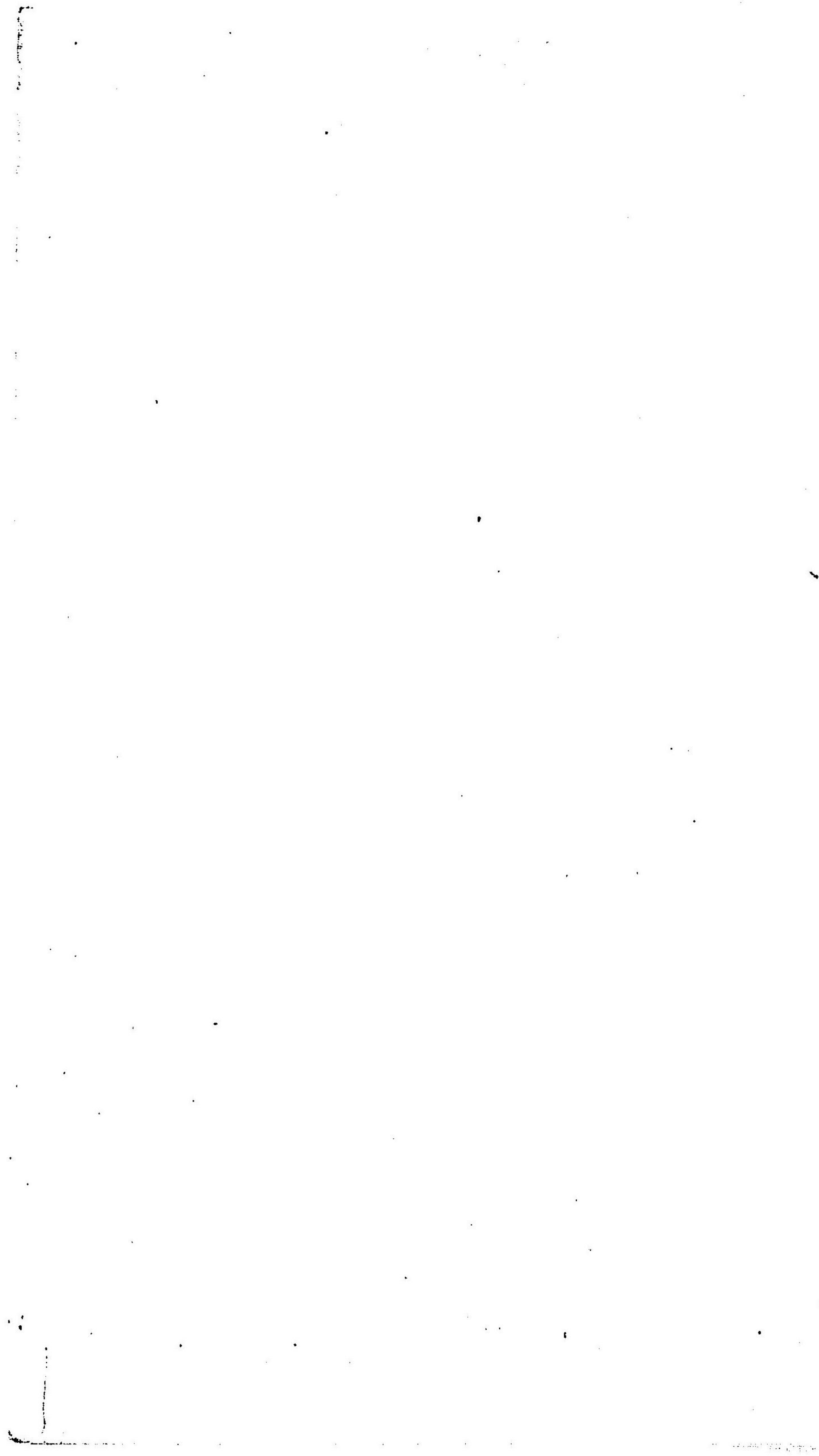
本書目次

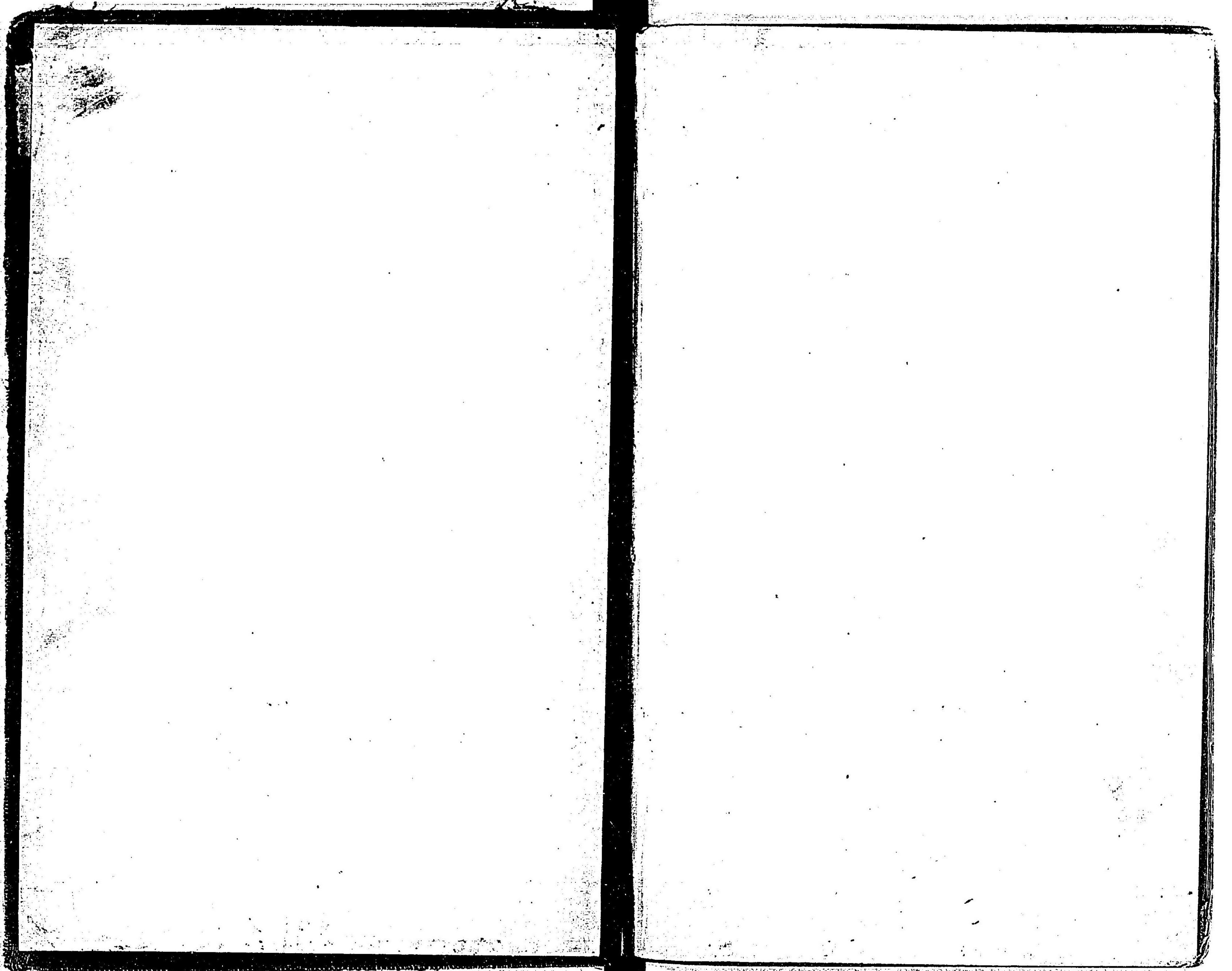
- 第一編 つりの 全一册
- 第二編 間一髮 全一册
- 第三編 僥倖 全一册
- 第四編 彫像師 全一册

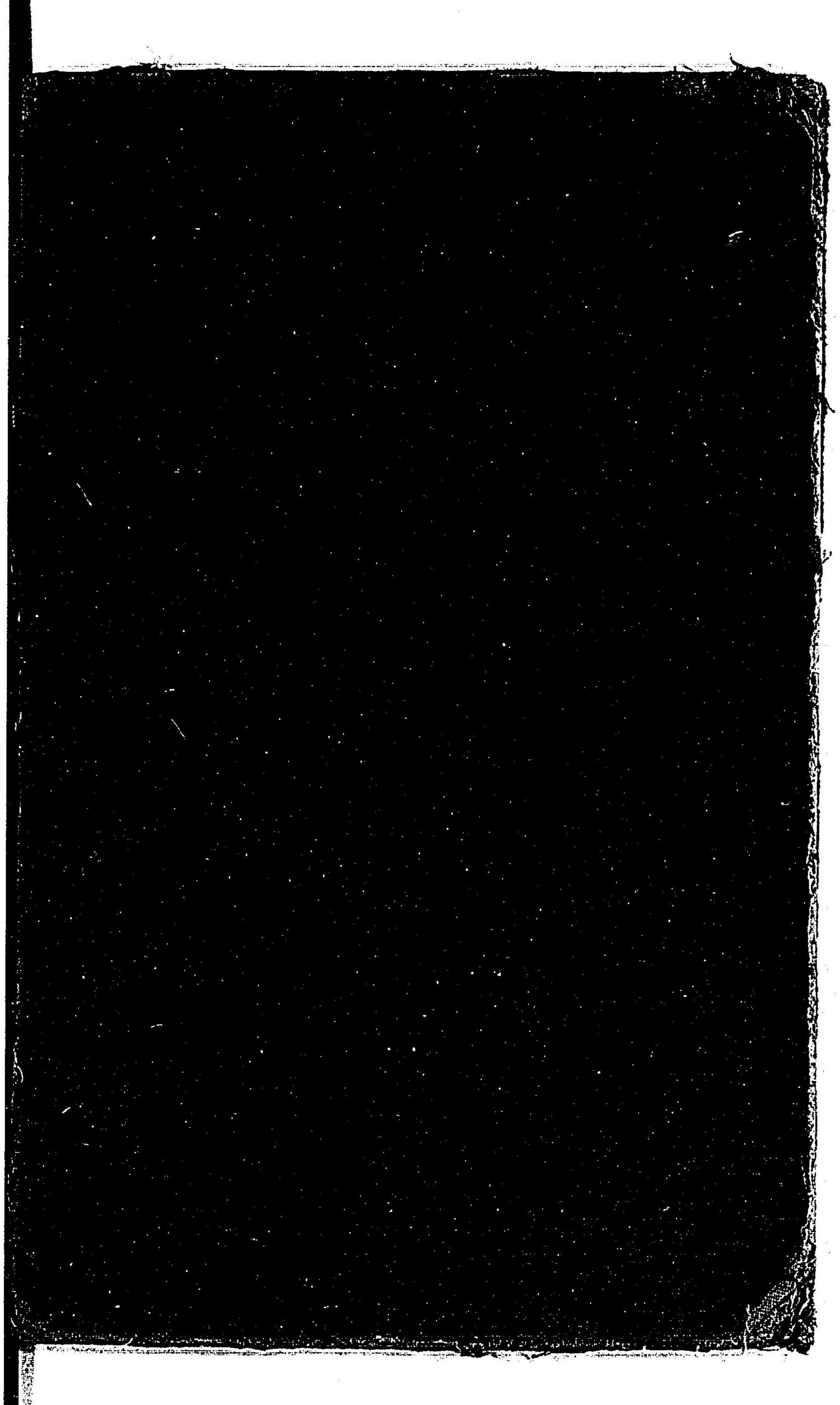
幸田露伴君作

内田不知庵譯









74
56

084854-000-1

74-56

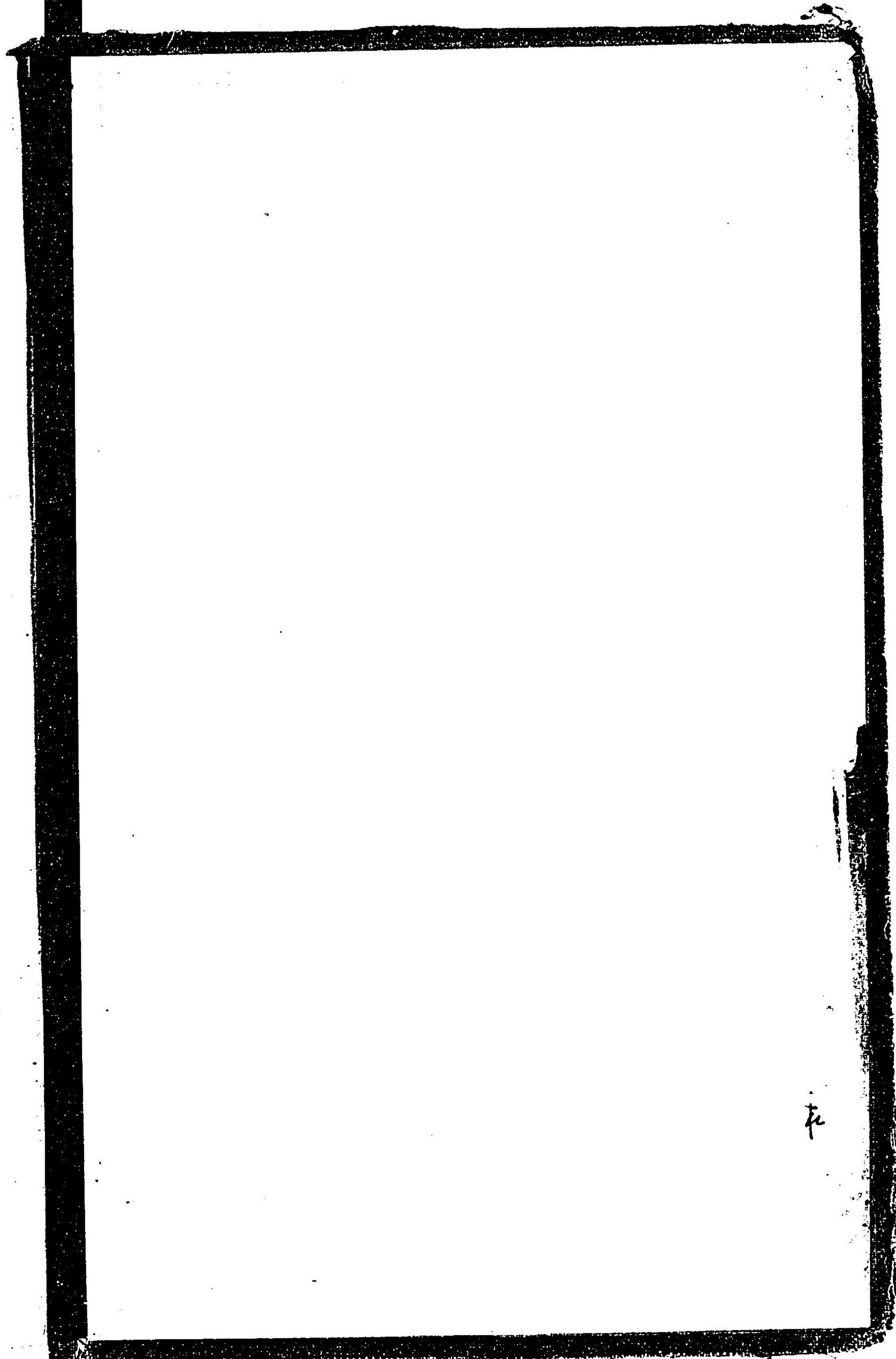
一葉全集

樋口 一葉/著

M30

DBB-0001





12